

史料紹介 土佐藩郷士・岩井孫六『江戸日記』

—幕末期土佐藩の政治動向を活写した新史料—

幕末史研究者 松田 智幸

(一) 『岩井孫六日記』の性格と内容

筆者が所蔵する本史料は、土佐藩より異国船御手当御用・江戸湾警衛の武役（軍役）を命じられて、安政三（一八五六）年八月一日、一年間の臨時御用の勤番をもって江戸表に出足した郷士・岩井孫六正路の「江戸日記」である。岩井家は、香我美郡王子村（現在の香我美町王子）に、領地二百三十石、物成（畑作）三十石余を領有する、経済的力に恵まれた郷士であり、当時の当主は、父親の岩井十藏正直であった。この孫六の臨時御用という藩命による江戸勤番は、実は父親の代役であった。

この「江戸日記」に記録された期間は、彼が土佐を出足した時から、翌安政四（一八五七）年十月十日に室戸に上陸するまでの一年有余である。本史料は、出立から帰国までの期間の日記帳「諸用覚」と、藩庁提出文書の記録控「諸指出扣」との二冊の文書から構成されている。さらに日記である「諸用覚」が時期によって二分されており、前半部が安政三年八月朔日から同四年八月十四日までの記録、後半部が安政四年八月十五日から同年十月十日までの記録である。そして二冊目の「諸指出控」は、一年有余の江戸勤番中の出来事に関して藩庁に提出した公文書の控である。

以上のような本史料に記された内容の概要は、次のごとくである。

一、安政三（一八五六）年八月十五日の前後に土佐を出足した藩士や郷士たちは、第十五代藩主山内豊信の江戸参府の前供、及び供達であった。そ

の正式な任務は、すでに安政元（一八五三）年のペリー米国艦隊の浦賀来航時に、江戸に派遣されていた郷士や藩士たちと同様、江戸湾警衛御用の武役（軍役）であった。藩の公務で出立した彼らには、江戸勤番中の一年間は、三人扶持、金十両が下賜され、江戸勤番は年番交代とされた。

一、岩井たちが江戸へ出立する前年の安政二年には、土佐の国元では、幕命を受けて藩主の直命で、異国船御手当という江戸湾警衛の御用に備えるために、西洋流砲術（抜隊竜）——西洋銃陣の訓練が命じられていたのである。したがって、本史料の日記には、筆者である岩井孫六自身の江戸勤番中における西洋砲術操練への出席状況が克明に記録されている。

一、岩井は、江戸勤番中に、西洋砲術の訓練に関しては、抜隊竜の操練を幕臣の下曾根金三郎、幕府鉄砲方・井上左太夫の与力である蜷川藤五郎に入門して修得し、さらに長沼流・北條流の西洋銃陣訓練を岩村藩主・松平誠之助の家臣・若山壮吉、小倉藩主の嫡男・小笠原伊予守の家臣である鈴木彦之進に師事して学んでいる。なお、土佐藩は、信州松代藩出身の佐久間象山門人である蟻川賢之助を江戸藩邸に招聘して、藩士に抜隊竜の訓練を行っていたことが、佐々木高行『保古飛呂比』に記されている。まさに、岩井が江戸に滞在した前後の時期は、土佐藩あげて西洋砲術・西洋兵学の修得を、藩士や郷士に課していたことが、本史料によつ

て立証される。

したがって安政三年八月の江戸表へ出足した藩士や郷士たちは、江戸滞在中には、江戸湾警衛の御用の合間には、前述のごとく、専ら藩主直命の西洋砲術の操練に励んでおり、この命令に反して、悠長に剣術修行などに打ち込む余裕など考えられないことであった。このことを裏付ける証拠として、岩井の日記の安政三年九月二十日に、父親である岡田義平の代番として江戸に出足した郷士の岡田以蔵が、翌年八月二十七日には御暇となり、武市半平太や田中孝左衛門（嘉右衛門）と一緒に、土佐に帰国した事実が記録されている。彼らもまた、岩井と同様の臨時御用を藩当局より仰せ付かって江戸に出足し、勤番の合間をぬって藩命である西洋砲術の調練に精励していたことは確かなことといえる。

従来の幕末期土佐藩についての歴史理解の誤謬は、坂本龍馬の場合にも認められる。これまで龍馬は、「御預郷士 坂本権平弟」と理解され叙述されてきた。が、新史料「山内家郷士御用人年譜牒」（山内家所蔵）

によつて、実は坂本権平は、郷士ではなく、格式三人扶持五石の藩士であつたことが判明した。また、龍馬が安政三年に江戸表に出足したのも、岩井と同様の臨時御用という公務であつた。このことは、本史料「岩井孫六「江戸日記」の参考史料として添付した、猪野半平「郷士年譜」にも明らか通り、龍馬と一緒に江戸に出立した、土佐藩西洋砲術師範・徳弘孝蔵の同じ門人であつた猪野が、江戸警衛という臨時御用手当の勤番で江戸へ出足したのと同様の役務であつたとみるのが妥当である。決して龍馬だけが、特別に自由な遊学が認められたわけではなかつた。それ故に、岩井や猪野が江戸表勤番の御用間に精励していた西洋砲術修行に関してもまた、龍馬の場合も同様とみるべきで、決して「剣術修行」ための江戸行ではなかつたということが、本史料によつても傍証される。なお、この点に関しては、龍馬自身が遺した龍馬関文書の「龍馬手帳」にも「抜隊竜」の操練記録があり、佐久間象山の西洋砲術塾の

門人帳にも龍馬の入門が明記されていることなどからも、歴史的事実であるともみてよい。

以上のような構成と内容の本史料は、黒船来航直後の安政三、四年における幕末期土佐藩の江戸表における緊迫した政治的あるいは軍事的な動向を克明に記録した日記であり、そこに記された内容は、幾つかの具体的事例を列記した通り、従来の土佐藩幕末史の定説や解釈に含まれる基本的な誤謬を明らかにし、根本的な訂正を迫る貴重な内容を含んでいる。

確かに、幕末期に土佐藩の郷士や藩士たちが江戸に出足した際の日記史料は、数点、現存する。だが、それらのいずれもが、内容的には不完全なものであり、特に安政年間における多数の郷士たちの江戸出足の性格や内容など、幕末期土佐藩の緊迫した動向を具体的に窺い知ることはできない。例えば、安政三（一八五六）年における江戸藩邸の動向を記した日記としては、御扈従である森正名（まきまな）の「日記」（高知県立図書館蔵）が存在する。だが、それは、史料そのものが後になって作爲的に解体・改編されたが故と推察されるが、日付が順不同となつているなど、記録された当時の原形を止めておらず、そこに、江戸における土佐藩士の動向を幕末期の歴史的な展開過程に即して読みとることが可能な史料となつている。さらに、佐々木高行の日記『保古飛呂比』には、江戸における土佐藩の郷士や藩士たちの具体的な動向が散見される。だが、そこにも、何故に郷士たちが江戸表に出足したのか、その性格や活動は如何なるものであつたのか、等々の記載は全く認められてはいない。しかしながら、同日記（「巻四」の「安政三年十月」以降の部分）には、次のように郷士や藩士たちが藩命によつて西洋砲術の操練を頻繁に実施していたことが記録されている点は、岩井日記の内容的な正当性を裏付ける史料として注目に値する。次に、同史料の中から岩井たちが江戸に滞在した時期の関係部分（「安政三年九月」以降）を抜粋して紹介しておく。

一 同月（筆者注、九月）二十七日、操練仰出候事

一 同月、会津藩長沼流兵学者黒小路松齋先生へ入門ス

（中略）

一 是月（筆者注、十一月）十二日、麻布御屋敷ニテ、初メテ操練仰出候事

（略）近來佐久間修理（筆者注、儒学者で西洋砲術師範の松代藩出身の佐久間象山）ノ門人有川堅之助（筆者注、象山は門人吉田松陰の海外密航事件に連座して幕府に捕縛されて江戸伝馬町の牢獄、象山の西洋砲術塾は師範代の蟻川賢之助が継承）ヲ御雇入レニテ、蘭式歩兵運動有之候（後略）

一 右同年十一月十五日当分操練御用掛被仰付

（中略）

一 同（十二月）下旬、古河端ノ山内邸ニテ操練ヲナス

ところで、本史料には、安政三（一八五六）年の築地藩邸における郷士支配頭は高島門人で西洋砲術師範の田所左右次（一八一二—一八七三）であったこと、そして品川藩邸の郷士支配頭は西洋砲術師範で郷士出身の御留守居組・高村造酒之丞（一八六〇）であったこと、両者は、西洋砲術家としては同藩の西洋砲術師範を勤めた徳弘孝蔵の後輩に当たるが、彼らは高島流西洋砲術を河野流、古田流と流儀名を改称し、品川・築地で、幕府役人立会の下に、郷士たちに操練していたこと、さらに地雷術や水雷術などの稽古も郷士たちに実施していたこと、等々の貴重な歴史的事実が明記されている。

また、前述したごとく、彼の岡田以蔵（一八三八—一八六五）が、父親の義平の代番として安政三年九月二十日、同じ徳弘孝蔵門下の永田友之助と一緒に江戸に出足していること、さらに岡田は江戸到着後は築地藩邸に詰めて西洋砲術（抜隊竜）の操練に励んでいたこと、なども記されている。この事実は、従来、岡田の安政三年の江戸出足は、「桃井春蔵に入門し剣道を学んだ」（『高知県人名事典』）などと解釈されていたことが、全く資料的根拠のない誤謬であ

ることを物語っている。

上記の岡田の事例をもつても明らかのごとく、本史料によって、すでに指摘したごとく、土佐藩の安政三年における武市半平太、坂本龍馬など多数の藩士や郷士たちの江戸出足が、従来解釈のような、単なる「剣術修行」にあつたのでは決してなく、幕府から土佐藩に命じられた江戸湾警衛のための臨時御用（異国船御手当御用）であつたこと、そして、そのために彼らは御用の合間には、寸暇を惜しんで西洋砲術の操練に励んでいたこと、等々の歴史的事実が判明するわけである。なお、安政三年八月十五日の前後に、第十五代藩主山内豊信の御供として随行し、江戸藩邸に詰めた郷士は、これまで不明であつたが、本史料によって、次の者たちであつたことが明らかになる。

山本安次 山本喜三之進 山崎七平 田村七衛門 田中恵三郎 野島清五郎 秦泉寺永衛 永田友之助 猪野光馬 猪野半平 藤村清八 山崎文三郎 池源六 田中嘉右衛門 大石弥太郎 谷作七 安岡恒之進 中島柳助 安岡覚之助

本史料「江戸日記」を書き遺した岩井は、彼ら郷士たちとの江戸での活発な交流の様子も克明に記しているが、彼らが藩主の直命を受けて江戸に出足したのは、あくまでも本務は江戸湾警衛であり、そのために必須な西洋砲術の操練にあつたことが、本史料によって明白となることを重ねて指摘しておきたい。

以上のごとく、本史料によって、幕末期の土佐藩の江戸表における様々な動向が、極めて具体的に明らかとなり、従来土佐藩を中心とする幕末史理解の様々な誤謬を訂正しうる貴重な史料であるとみてよい。今後、本史料を詳細に分析すれば、さらに幾つかの点で、従来幕末土佐藩史に訂正を迫るような新事実が提示されることとなるであろう。そのような観点からの、本史料を分析し考察した本格的な論究は、他日を期したい。

(二) 岩井孫六「江戸日記」

凡例

次に紹介する史料の記載は、原文およびその表記を尊重したが、読者の利便性を考慮して、次のような措置を講じた。

一、引用史料には、読みやすくするために句点・読点・濁点を、適宜、施した。
二、引用史料原文の旧漢字は可能な限り常用漢字を用い、また異体字の場合も同様の措置を講じた。

(例) 鉦・砲↓砲、劔↓劍、藏↓蔵、學↓学、德↓徳、數↓数、嶋↓島、
會↓曾、襪↓根、扣↓控、臺↓台、會↓会、礮↓砲、迄↓迄、處↓
処

三、明らかな誤字・あて字、あるいは不適当な箇所や疑問箇所には、次のように訂正するか、該当文字の右側に「ママ」を付した。

(例) 陳↓陣、直↓値

四、変体仮名は、「ひらがな」あるいは「カタカナ」に換えた。

(例) 之↓ノ、而↓テ、江↓エ、者↓ハ、ム↓ヨリ、ゐ↓イ、ゑ↓エ、キ
↓イ、而已↓ノミ、等々。

五、史料の中の欠損箇所あるいは判読不可能な箇所は、□：□と表記した。

六、他の解釈の可能性がある場合、あるいは筆者が推測した語彙には右側に(カ)を付し、また読みにくい慣用句や熟語にはルビを施し、さらに難解な人名や地名などにはカッコして、その正式な表記や意味を付記した。

(1) 史料「江戸日記」(全文)

八月朔日、六半時(筆者注、以下同様。午後七時)布師田着。宿より外の店屋にて、為持候酒肴にて飲。其内高知、貞次、シジミノ汁ひとしお一入、咽のどヲ潤ス也。

同日 晴 右出足。国見コンニヤク難所ヲ行。七時半時(午後五時)本山着。□：□ニ付野島清五郎杯ノ宿ヨリ□：□夫ヨリ直ニ寝ル。

同日 晴 本山出足、半途□：□雨ニ成候へ共、直ニ止り□：□頃、川御番所着。下番□：□宿ノ亭主へ□：□夜仕替出来来ル。

同日 曇 朝六ツ時(午前六時)立川出足。名高キ笹ヶ峰へ登りにて、霧も深くながく、少々雨ニ移り、雨具附る程にもなく、無程峰ヲ越し、余程下り候所、垂水峠たるみと申由。夫ヨリ腹庖刀はらほうちょうへ掛り候。又下りノ坂実ニ腹ガ付申候。夫ヨリ水か峠と申へ掛り候、時九ツ時過(正午過)西日ノ照付ニて暑サニ堪兼、大ニ難儀。尤峠ニ宿有。此清水如水。且素麵温酌ニて咽ヲ潤シ、四、五丁行と北受ノ大海見晴し、中国・九州・四国ノ島々眼下ニ見下し、前日ノ難苦ヲ忘れ、七時過(午後四時過)川ノ江、竹林源太郎と申宿屋ニ着。酒ヲ飲、寝ル。

同日 川ノ江出足。少々雨ニテ、道立テハ晴雨交々も、暑氣難洩。大難儀ながら、日入頃丸亀着。此所ハ船着ニ付賑々敷、夜ニ入、船ノ工面杯付、先達の田村組四人ノ宿、岸本九郎太郎宅へ尋ル。自分の宿ハ、あみや為次郎也。

同日 晴 出船ノ工面。諸勘定ニ隙取ひまど、もはや昼頃宿ノ亭主為次郎ヨリ酒肴馳走ニ逢。無程七ツ時頃(午後四時頃)舟ノ出達相調、山田ノ兩人(田中嘉右衛門・田中恵三郎)同船ノ約束ニテ、荷物は池源六直乗候船へ頼。主従拾人乗ニテ、七ツ時過丸亀乗船。天氣穩。此夜汐待致し、八時(午前

二時) 同所出帆。室ノ津方志し 讚州高松領ノ内、槌ノ音と申、山ノ北ニテ夜明ニ成ル。然ニ馬藏ハ直乗ノ船へ荷物ノ番ニ乗セル。

同 七日 晴 追風宜、船中兩度酒給。扱七ツ半時頃風ノ勢強、矢ヲ射るごとく同夜八ツ時(午前二時) 室ノ港着也。

同 八日 晴 朝六時上陸。御用達土佐屋何某宅ニテ支度スル。夫ヨリ遙ニ行、姫路城下ニ至リ、昼支度致し、城下ヨリ三里計り行。大師一夜建立ノ石宝典ヲ見物し、夫ヨリ高砂ノ町、五ツ時頃(午後八時頃) 宿屋つかや何某二着。一同ニ酒給、寝ル。

同 九日 晴 右つかや出足。高砂相生ノ松見物。尾上日待ノ松、釣鐘、別府ノ住吉手依ノ松等見物。暫休足致し居候所へ、馬藏来り、昨八日ノ夜難風ニ逢、乗組七人、船頭ヲ加へ都合拾人、姫路ノ沖合ニテ、船ヲ傷メ水船ニ相成、荷物不残流失。助船ヲ呼、よふよふ一同命計りハ助りし由。時ニ直様引返し、播州松原と申ニ乗組ノ人、宿ヲ借居候ニ付、陸路ノ人数参り候所、早、姫路御役人作配を以、荷物不残灘寄致し候を、宿迄為運、右始末彼是大ニ当惑。一同難儀千万ニテ御座候。夫ヨリ町家狭り候ニ付、エチ川と申所ニ持行、塩出し致し申候。宿、田中屋為右衛門。

同 十日 晴 中村松原ヨリ五六丁西北ノ川原へ荷物不残為持行、塩出し致し始末付ル。尤九日ノ夜当地ノ庄屋、炭本惣右衛門宅エ、姫路様御役人辻縫右衛門、宮田伝六と申候兩人出張ニテ、行宗氏一所ニ参り引合付ル。九日ノ夜ノ事也。此夜炭本惣右衛門ヨリ酒肴倒来。

同 十一日 曇 旅宿田中屋ニテ荷物ノ手入杯致し、徒然ニ相、直夜ニ入酒飲、寝ル。

同 十二日 サダチ氣ニテ、早朝藤村氏と御役人ノ宿ニ参り、当所引弘ノ相談致し、脇ノ旅宿へ何角示談ニ参り、或ハ待受、七ツ時過藤村、田中兩家ノ宿エ被招、行宗氏、山崎一所ニ参り、酒数行ニ及、少し箸拳ノ機嫌ニ成、四五番勝負ノ所へ、御役人宮田氏来り、鳥渡引合被帰、夫ヨリ同宿ノ人、一所ニ宿へ帰り、将基杯コン立、慰ミ寝ル。

同 十三日 晴 度々当所引弘ニ相成候様ノ事、御役人エ引合候内、酒井様御船奉行ヨリ使来り、口述ノ委細指出帳ニ控置。尤晚方行宗桃源老、野島清五郎、池源六、三人役人宿へ参り、船頭始末ノ間受取、宿へ是迄認違ス。

同 十四日 晴 早朝松原村出足。加古川通り一同通行。七ツ時過明石着。人丸大明神ノ社へ参詣。社前ノ茶店ニ名物明石の月と言菓子賞翫。夫ヨリ御宝物拝見、薩摩守忠度卿ノ御像、小サネノ甲、管公ノ御自筆、人丸卿ノ御自筆、大閤秀吉公ノ御像、玉ニツ有。見物終り、大石良雄自筆ノ鐘鬼^(マゴ)有リ。門前ノ石ニ、

灯笼や はかなき夢を

夏の月 はせを

梅室書、

書見物し、宿、明石大倉谷、石井五郎兵衛ニテ酒飲。一杯機嫌ニテ浦辺へ月見ニ行。

同 十五日 晴 右出足。須磨ノ浦、舞子ノ浜ヲ過、敦盛卿ノ塚、五輪ノ前、名物ノ蕎麦不味。なかに三膳給。夫ヨリ須磨寺へ参り、義経ノ繰掛松、且宝物百銅にて見物。敦盛ノ絵像彼是、別二十六錢ニテ式枚有リ。門前ニ若木ノ桜有リ、夫ヨリ兵庫ニ掛リ、楠公ノ墓エ参詣。三重ニテ、石碑高サ四尺位河内。二ノ台横五尺位泉州ヨリ。三ノ台高サ五尺計り、はば九尺余撰州。右三ヶ所ノ寄附。後口北向ニ楠公ノ像有リ。見物終り西ノ宮ニ着。木津屋勘助宅ニ泊ル。

同 十六日 晴 同所朝七ツ時出足。尼崎ヨリ乗船致し九ツ時頃着坂。届差出。強テ六ヶ敷も無御座。其余ノ書面一切留書役島村重藏へ相頼。夫ヨリ二ノ宮甚平己屋へ参り、新宅組合ニテ一包贈。紀伊国屋忠右衛門宅ニテ荷物片付候内、二宮ヨリ呼ニ参り立帰候処、酒ニ相成、折節猪野半平着坂ノ場合ニテ一所ニ飲。夜ニ入宿へ帰ル。朝へ掛雨。諸組段々着坂。

同 十七日 用事大半片附。藤村清八、田中兩人(嘉右衛門・惠三郎)、野島清五郎、山崎文三郎、一所ニ御城拜見ニ行。七ツ時前宿へ帰、内へノ状認候

都合、二宮甚兵衛(甚平)暇乞ニ来り、其前為道中、藥物經節式本贈来り、此方ヨリも酒壺升ノ切手贈ル。夫ヨリ御船賦有之、諸組七人と一所ニ淀船三艘ノ御賦ニ相成、夜五ツ時過乗船ニ、中窮屈成事也。

同十八日 右船中何ニも給物ノ用意無御座、餅ニてあやつり居候所、豆腐ノ醬油汁売ニ参リ杯買。味甚宜、一杯六文也。九ツ時過伏見着。尤諸組と一所ニて大仏屋何某ノ宿ニ、先達着居支度致、八ツ時同所出足。伏見御屋敷、門田宇平己屋へ尋、一包贈リ、夫ヨリ逢坂ニ掛、蟬丸ノ墓有リ。七ツ時過大津ニ着。一里ノ船渡しニて五ツ時草津着。疲レ体ニテ少々給ル。

同十九日 雨 同所出足。半途、風添傘ニテ迷惑、自分些風邪心地ニテ、池、山崎は坂ノ下迄行。其余ハ土山へ七ツ時過着。悪寒凌ニ少シ給寝ル。

同 廿日 雨 右同所六ツ時出足。宿駕ニ乗、坂本迄式里半。賃三百五十也。同所ヨリ関迄一里半、駕婦百七十二文也。同所ヨリ龜山迄一里半、駕人足百拾文也。龜山ヨリ庄野へ二里半ニて駕人足三百位。同所ヨリ石薬師へ二十七町五十文也。同所ヨリ四日市へ三里、人足賃百八十文也。日入頃宿入、風心地故少し給寝ル。宿主山本屋長左衛門。

同廿一日 晴 四日市六ツ時出足。尤泥土ニ付、軽尻ニテ桑名迄乗ル。乗前七十八錢也。四ツ時前桑名着。脇本陣福島屋作右衛門宿ニテ支度致。船ノ工面付、九ツ時同所乗船。天氣ニテ追風宜、七ツ時宮着。七里ノ渡海ニテ船路半より、名護屋ノ御城見ル。宮ノ宿、船附ヨリ余程北へ行。錢屋吉三郎宅ニ着。繁華成事大阪ニ倍ス。余程酒給寝ル。

同廿二日 晴 右七ツ時半出足。鳴海へ参り候所、池三人組泊り居、夫ヨリ跡先参リ、池鯉鮒ニテ昼飯。夫ヨリ内鳴海ニテ、「そふた」の取込買。池鯉鮒ヨリ一里半計参リ、三州矢矧橋有。岡崎ノ御城下ニテ、長サ二百八間也。岡崎ヨリ軽尻ニ乗、一里半来り藤川へ八ツ時過着。髪・月代さかやま抔致、風邪扱置、如例ダレヤスケ給、寝ル。

同廿三日 雨 同所出足。小雨ニて参り候内止マリ、道ニテ生魚ヲ買。鎗ノ柄ニ、ククリ為持、間ノ宿ニテ、酢付ニ為仕成候所、殊ノ外コゼ虫(ゴキブ

リ)ノ臭有之。よふよふニ膳給。白須賀ニテ惠三郎と酒三人充買、温鈍柿ノ肴デ、ホラホラと致し、軽尻ニ乗、七ツ時過、荒井着。又雨ニ成ル。此日ヨリ富山(富士山)見ユル也。御用達前田作衛門ニテ、泊ハ色々々馳走有之。謝礼として七人組武步耆朱遺ス。「遠江灘」。

同廿四日 雨 同所御番所、宿ノ亭主世話ニテ六ツ時出足。一里ノ渡海些風悪敷候へ共、無難着岸。夫ヨリ舞坂名物蛤ノ吸物。大津領ニ、蓮五町四方程ノ池有之、見事。浜松領ノ辺ヨリ雨強相成、宿へ九ツ時前着。甚空腹ニテ唐芋抔給来り、此所ニテ昼飯。天龍川ヲ通、是ヨリ宿駕ニ乗、七ツ時見付着。例ノ通少し給、寝ル。

同廿五日 曇 朝七ツ時、右同所出足。掛川ニテ名物ど(マ)汁給。初テ御国許ノ味有之由。一同承知。日坂ヲ過、夫ヨリ小夜ノ中山、夜啼石ノ古跡有之。且あめノ餅貰。口上有之。然ニ右峠ヨリ少し来り候所ニて、富士半嶺ヨリ麓へ掛初テ見ユル、布引山一文字ニ幾里と見定メがたし。大井川へ掛り候場合、雨ニ相成、去共無事ニ渡リ、七ツ時過嶋田柏ヤ清五郎着。川越ノ悦、肴迎ハ承合候得ども、何ニも無御座、カマスの干物、塩煎ニ為仕成、豆腐ノ奴ニて藤村と給。関ニ入り候場合ヨリ、勁はつとく數風雨ニ相成、疊はねを剥上騒々敷、夜四ツ時頃風治り申候。此夜本陣大久保新右衛門ヨリ使来り、生菓子倒来ニ付、為会釈、二百遣ス也。

同廿六日 快晴 出水有之ニ付、追々問屋場ヨリ左右次第出足ノ手合致し有之。川場へ昼少過、見分ニ参り候所、名ニあふ大井川出水ニて、水色土ノごとく、三四日程ハ川止メニ相成候様子。扱又道筋、並松倒レ、道荒ニて人馬賦迄出来不申、当日右宿柏屋清五郎方ニテ逗留致し申し、本陣へ引合逗留ノ始末書取受。

同廿七日 晴 朝六ツ時同所出足。四ツ時頃藤枝、武藏屋善四郎方着。道筋段々並松倒レ、潰家等有之。右宿はづれ橋落、馬荷通り不申、見合居候内、晚景ニ相成退屈ノ所、幸、隣宿ニ江戸人泊り居、宿婦を以相談致し、一興相催。近来ノ上手ヲ聞、一同感じ入申し、夫ヨリ猪半、藤清一所ニ少々給

ル。然二此昼、割羽織袴ル、表、裏、仕立料共式歩耆朱と百九拾四文也。
夜二入出来来り勘定済、寝ル。

同廿八日 晴 馬繼慥二不相分、よふよふ七ツ時頃本陣ヨリ相分、直様同所出足。四里参り、夜二入まり子、桑名屋何兵衛着。道筋段々並松倒レ 潰レ家有之様子、通り掛リニも所々見受申しぬ。

同廿九日 雨 朝六ツ時同所出足。一里計り参リアベ川渡し、物部川位も可有之哉。賃銭耆メ六百也。破風屋六兵衛名物餅(阿部川餅)。四ツ時過江尻着。空腹ニテ藤村氏と四人丈ケ鱈ノ煎つけ、かまぼこニテ快酔。惠三郎ノ方不勝ニテ暫見合、九ツ時前右出足。沖津へ日入頃着。田子ノ浦、三保ノ松原ヲ眼前ニ引受景色好。観山楼ノ款字有之、宿主三葉屋七郎左衛門。八歳童広石ノ軸一行ニテ、「君子慎所」ノ字見事也。

同 卅日 晴 朝正六ツ時右出足。沖津川ヲ過、薩田^(マヤ)時ニ致リ、富士ヲ日ノ出少過ニ北受二見受、いかにも晴天ノ景色。夫ヨリ耆里計り新坂、富士見坂とも云ヨリ、海へ掛リヨリ望候へば海面ハ見不申候へ共、前ニ北山遮リ不申、裾ニ掛扱も見事二見ユル也。富士川ハ荷物計ノ賃銭ニテ、人渡しニハ錢不入。追々吉原ニ到リ昼支度致し、原へ程近ク到り候。松原ニテ、高村先生(造酒丞)、田村七衛門、山崎七平ノ組へ追付、夫ヨリ一所に七ツ時沼津着。松坂屋源介方、上下八人共着。此夜高村組ノ宿へ被招。尤肴少々其前ニ贈ル。日暮頃ヨリ五ツ時過迄給居、其内婦人ノ三絃参りさわぐ。

安政三年九月朔日 晴 朝六ツ時右出足。一里半参り五時前三島着。箱根山廿五日ノ夜ノ風ニ倒木夥敷、山間^{やまどめ}ニテ人馬通行止り、其上姫路様、吉田様、箱根峠当宿御泊ニテ、朝諸国諸士ノ通行一所ニ相成、人馬間ニ成、当日山越相調不申、本陣世古六太夫隠居、三五亭与平方ニ落付。床ニ横物ノ軸懸り、富士越ノ雨竜ノ図、贅有り「去秋の 気巻堂^{ままたちのほ}知登^{けり}り希里 富士の山」玉蓮観主人と有り。此所ニテ裕一枚表裏共、三歩と六百、袖口五日市地百八十九文、襦半一枚五日市地 襟割式尺五寸添耆メ七百也。メ金耆奴と八百拾七文。仕立料式枚ニ付三百也。此夜小鱈ノ塩タタキ、馬蔵料理ニテ国

許ノ噂ニ、塩梅^{あんばい}好出来 酒三合ハヅミ、清八子と給、寝ル。

同 二日 曇 朝六ツ時半時三島出足。馬馱ノ前ニ付山本喜三ニ逢、中嶋柳介組会。是杯も急居候へども此度川筋出水、箱根山間ニテ帖順ならでハ、人馬繼立作配出来不申趣ニテ相別レ、先キへ踏出し、宿はづれヨリ否山へ掛候所、並松夥敷倒レ、名高キ難所十丁計り上り候所ニテ、少々雨ニ相成候へ共、大降ニ不至、只霧深ク、山八合位ニテ四方五六間をば難見分、当日姫路様御通行、山道嶮岨ノ上入組、よふよふ九ツ時時ヨリ八丁計り下り、中宿へ着。御用達天野平衛門使、出迎来り述候ニハ、只今普請中ニテ招請難出来、隣宿へ申付候ニ付、御入被下度段挨拶有之。追々平左衛門出会、酒肴贈り来り、馬繼、且御番所等手引致し候ニ付、為謝礼四人組合ニテ二朱贈ル也。夫ヨリ雨も降不申、下り坂ニテ日入前小田原着。当宿姫路様御止宿ニ付、右越迄と志し候所、馬繼出来不申趣ニテ、終ニ嶋本屋伊三郎方ニテ泊ル。

同 三日 雨 朝七ツ時右出足。川場へ参り候所、姫路様、且因州家中ノ下り人数と混じ合、酒匂川一寸渡し不申、漸日ノ出頃相渡り、荷物見届ニ川原ニテ立り。冷氣凍々身ニ染。夫より姫路様御人数は前後ニ成り 道筋泥土ニテ、藤沢より宿駕ニ乗り二里参り、日入頃戸塚着。倉田屋次郎右衛門方ニテ泊ル。

同 四日 雨 朝六ツ時右出足。程かや(保土ヶ谷)へ参り候所、些草鞋ニ被喰候ニ付、宿駕ニ乗、雨中七ツ時少過、御出入大津屋着致し候所、前月廿五日ノ風ニ大傷ニテ、中々止宿等出来不申。夫より品川御屋敷着。然所此度ノ風ニ、御己屋段々傷ニ相成御修覆中。去共仲間御賦リノ己屋ハ、新規ニ候ニ付堅固ニテ、猪野半平、池源六、野島清五郎、山崎文三郎杯ハ、昨日三日常着ゆへ、御己屋掃除等も世話なしニテ、然ニ洗足致候水サへ不自由。勿論給物連ハ一つも無御座候。此夜大津屋ヨリ、一度給候分持来ル。同 五日 曇 藤村と相小屋ニ成ル。諸差出相認、扱朝飯ハ宵ノ残りヲ給候所、菜ノ物無御座、よふよふ宵ノ残りノ香ノ物、一切残り居候をかじり候

テ給仕候。夫ヨリ藤村、田中同伴ニテ、御上屋敷へ届ニ参り、初テ江戸前見物致し、実ニ聞シニまさる廣大成事ニテ御座候。届相濟藤村ノ類族（義父）桑瀬平市と申人へ、差出様ノ物相頼、右己屋ニテ手酒テ馳走逢。肴御国流ノボラノ酢塩梅宜、国を出て初テ時節ノ白酒ヲ飲。内ノ神事ヲ思ヒ出し申候。夫ヨリ少々買物致し帰り、此夜高村ノ己屋へ被招、藤村と一所ニ参り、又飲。自分己屋へ返り寝ル。四ツ時也。

同

六日 雨 朝用事有之。然ニめし無御座、家来は外輪へ給ニ遣し、上分二人ハ大津屋へ申遣し候所、一向持参無之、よふよふ四ツ時過朝飯給申候。何もかも殊ノ外不自由。品川近辺ニハ相応ノ諸品無御座、是非江戸前ならでハ相調不申、難儀成事ハ筆ニ尽しがたく、家来兩人ハ諸品買ニ遣し、其跡ニテ恒之進（安岡）、安次（山本）杯も着致候所、是以同様ノ事ニテ御座候。夫ヨリ八ツ時頃ヨリ高村先生誘ニテ、浜川御台場ノ御筒拝見ニ同宿（藤村清八）一所ニ参り、日入前御屋敷へ返り、先生を迎四ツ前頃迄咄し被帰候。

同

七日 快晴ニ相成五ツ時少過御己屋出足。増上寺辺ヨリ愛宕山へ上り候所、大抵御郭中ヨリ市中へ掛、一目ニ見下し美ニ江戸ノ廣大成事筆ニ尽し難く、大通り近辺少々見物致し、日入少過御己屋へ帰ル。然ニ此度ノ大風、近来ノ勤敷事ニテ、諸御屋敷初、堂社市中共大破ニテ 既ニ築地御屋敷前ノ御門跡等倒レ、且右御屋敷ノ御己屋も倒レ、御小人老兩人死失ノ由、珍敷大変ニテ御座候。

同

八日 晴 御門出等も不致、御出入呉服屋、仕立屋杯参り、道中ニテ塩ニひたし候着用等仕立為直候手賦り致し、且何角買物ニ急ニ世話敷、只々世帯用ニ日暮ル。

同

九日 節句ニ付菊を買ニ遣し候へども、此度ノ風雨ニ傷（ミ）、無御座由ニテ、此日ハ御足軽小屋杯ハ酒盛ニテ、拍子物・発声。高村小屋へ碁打ニ参り、夫ヨリ野島（清五郎）、山崎（七平）ヨリ被招、少シ給。自分小屋へも先生、七衛門（田村）待受ル。夜四ツ頃迄静ニ飲申也。

同

十日 晴 先用事無之、退屈ニ付先生小屋へ碁打ニ参り、此日ハ先生ノ神事ノ由ニテ案内有之、同宿一所ニ参り申候。着用仕立直し、且外輪ノ衣服無之ニ付、他出出来不申。段々注文致し遣ス。扱此日御内意有之候。右子細ハ此度、大守様御着府ノ節、品川ヨリ御繰込可申事ニテ 右ニ付小筒、数十挺為御持ニ相成、右御足軽ノ小頭と申様成役、被仰付候人数、

安岡恒之進 田中嘉右衛門

野島清五郎 猪野光馬

岩井孫六 藤村清八

池 源六

ぶつさき羽織、立付遠馬笠ニテ相勤候様申来ル。

同十一日 曇 右装束ニテ段々評議有之。決定ニ不成、先呉服へ注文申遣候也。

同十二日 御飛脚立前ニテ、国へノ書状相認、終ニ脇ノ小屋へ嘶ニ行也。

同十三日 御飛脚日延ニ相成候由ニテ、又々書状認申也。右運賃目、老包ニ付三文也。

三文也。

同十四日 呉服屋来り御用ノ節ノ着用、見合（シ）候へども評義替ニ付、持参ノ品不用ニ付戻ス。此日可笑しき事有り。十三日ノ夜先生（高村）清八（藤村）七衛門（田村）三人投網ニテ鯉打ニ行約束出来、右ニ付先生上御屋敷ヨリ帰りがけ、高輪ニテ待合スニ付、網打掛リニ、右場所へ来り候様ニテの約束ノ所、清八ニは呉服物見合、七衛門ニハ何とかしけん、先生の申合ノ時刻後レ候内、少々降出し終ニ兩人共不参、七ツ過頃内ノ小屋へ七衛門参り、少給居候所先生ヨリ呼ニ来り、七衛門ニは直様参り候所、先生待はうけニ相成候上、道ニテ犬ノクソ踏、尚更腹立ノ所、七衛門一首。

小便に さたせず足を

揚さして 恐れや犬の

くそふますとは

先生返し

藤くららの ねじれかやりし
腹立に 犬のくそさえ

やはり其のまま

夫ヨリ七衛門此歌を提、当小屋へ参り、藤村ハ快寝ノ所起コされ、右ノ歌
を見大笑ヒ致し七衛門帰り候跡、一同ねられずして、

藤村

文字にさへ 魚に留ると

かくからに 七がとめしと

しろしめせ君 少し子細有之

孫六

おもいきや 親共師とも

いふ人を 犬のくそまで

ふみつけんとハ

大笑大笑

同十五日 雨 江戸前買物ニ参り候処、伊勢屋藤蔵方ニて呉服物見合候内、余
程風雨ニ相成候へども躰やがて晴上り、何角買調、尤遠馬笠式歩と式百四十八
文也。矩日ニ相成候ニ付、日暮頃御小屋へ帰ル。

同十六日 晴 御着府前ニテ、何角御殿初御座敷内掃除せんたく閃度、仲間中も別テ御
内意組は其拵ニ心配り致居候処、夜ニ入御詮儀替りを以、郷士ノ小頭役ハ
止リニ相成安心也。

同十七日 晴 高村先生呼に被来、鯰打ニ藤村一所ニ参り候所、六節七節ノ魚
沢山ニて、十六尋位ノ九節を以先生棹子藤村ノ網ニて四ツ過ヨリ七ツ前迄
ニスリチ、イナ共七十計、其外メナガ、チヌ子ヲ四五位取り申候。誠ニ
面白事ニテ御座候。夫ヨリ角屋と申ニテ、一寸為仕成、日暮頃迄飯帰ル。

同十八日 晴 当日は 御着府ニて当御屋敷昼ノ被仰出、仲間ハ一同上御屋敷
へ参り、其内煩うるせノ人安恒（安岡恒之進）、田恵（田中恵三郎）、秦永（秦
泉寺永衛）三人。御旗付ハ山七（山崎七平）病人有之、田七（田村七衛門）

計はかり、御出入御門ノ内、御奥御殿ノ少し北ニテ御目見仕、七ツ時過（午後四
時過）着館也。夫ヨリ御目附中へ後藤助四郎、渡辺弥久馬御供ニテ当着。
御当着恐悦申入レ相濟、桑瀬小屋ニて再び藤村と一所ニ逢馳走。日入頃刻
ヲ取鮫洲御屋敷へ帰ル。夜五ツ時也。

同十九日 晴 御足軽九平御供ニテ着候由ニテ、五ツ時頃小屋へ来リ内ヨリノ
状受取、慥成左右も申聞、嬉敷候。然ニ昨夜ハ官服共難義致し候段咄候ニ
付、肴杯取寄可遣と存候内、上御屋敷工参り候趣ニテ留守ゆへ、夜ニ入小
屋へ呼一所ニ飲、此度御供ノ足軽三百何拾人ノ由。其内ビスノ御筒五十
挺、火繩ノ御筒五十挺、猩々緋ノ袋ニ入左右ニ御備、げニも仰山成事也。

同廿日 曇 高先（高村造酒丞）・田七（田村七衛門）・野清（野島清五郎）・
藤清（藤村清八）・山安（山本安次）・山文（山崎文三郎）・池源（池源
六）一所ニ沖へ鯰打ニ参り、船三艘を以乗出し候所、此日は余計取レ不
申、去共肴ニ成程ハ漁致し、大津屋ノ下ニテ社中田七・池源ノ料理を以
日入前迄飲帰ル。

同廿一日 曇 朝髪、月代済ヨリ、江戸前へ藤村と買物ニ参り、山陽翁（頼
ノ軸物・唐琥珀こはくノ地袴求申候。此ノ代壹両式朱・袴ノ代式歩也。其余少々
相調、日暮過御小屋へ帰ル。

同廿二日 曇 四ツ時ヨリ雨ニ相成、他出も不致、馬藏ニ灸為致候内、昼過野
鳥家来清介ヨリ留守及、竹村（節之進）ヨリノ状当着致居候。迎届呉ル。
安岡恒之進よりも、川田俊平ヨリノ状持参致し呉也。

同廿三日 晴 迎へ灸致し候内、夜須（香美郡夜須村）源衛門来り菓子貰。大
小初拵研一切仕成候ニテ、大小小道具持参りニテ、塩入ニ相成候大小研、
荒鞆ノ仕成頼ム。山本安次来り灸中囲碁、高村先生も被見候処、一二番ニ
テ日暮ル也。水風呂出来候迎呼ニ来り、北野二行。

同廿四日 晴 朝御足軽九平事、市郎平上御屋敷へ参り居候由ニテ印判頼ミ、
南鍋町小林近江へ詔あつら有之、出来致し居取帰リ呉ル。代料式朱也。書状認
候テ、日暮ル也。此日高先、藤村と鯰ニ行候処、風立ニテ取レ不申、五六

本とメナガ・コハダ少々獲物有之也。

同廿五日 晴 早朝稻荷様へ参詣。野島清五郎ノ方同道ニテ、馬藏召連、御殿

山ノ方ヨリ三田へこと参り候内、遥西へ見晴し富士積雪見候処、実

ニ美麗ニテ御座候。里数ハ三十里余リ有由。半途ヨリ野島と別レ日比谷ノ

御屋敷へ参り、大石弥太郎・谷作七へ逢暫咄致し、鈴木(彦之進)へ入門

ノ義相談致し置、夫ヨリ京橋金六町ノ桐篁司相調、三ツ引出錠前付三歩沓

朱也。桐蠟引ノ箱火鉢沓朱、野風呂一ツ沓朱三朱余、ギヤマン徳利二

ツ、同盃ニツニテ箱共八百十六文也。求帰ル。

同廿六日 曇 藤村江戸前へ行ニ付馬藏添、昨日ノ買物取ニ遣ス。筆筒一つニ

付三歩沓朱。

同廿七日 雨 書状相認居、陸目付北代覚助へ引越ノ悦ニ参り、其ヨリ高村ヨ

リ呼ニ参り居候ニ付参り、困碁ニ相成夜ニ入帰ル。

同廿八日 状数通相認、晚景田中小屋ヨリ案内有之、日入暮ヨリ参り五ツ時過

帰ル。此夜曲有。

同廿九日 晴 朝五ツ時前同宿(藤村)・高村先生一所ニ沖へ参り、富士見ゆ

る也。此日鱈式十とる。高村小屋ニテ手料理ニ鮓ニ柚酢ヲ混ぜ仕成候処、

殊ノ外味宜、四ツ頃迄飲ム。

同 卅日 晴 寒風烈敷、状認。もはや昼頃、同宿ニ日心地(二日酔い)ノ

迎エヲする連一寸初候場合、田村小屋ヨリ困碁ノ趣向ニ付、呼ニ来リ参リ

居、七ツ過風呂ニ入。此日高村仕入ノスイ風呂ヲ借り、馬藏わかし有之。

十月朔日 晴 書状認ニ都合、又田村小屋ヨリ申参り出掛候処、海晏寺ノ楓

見、且町見ニ被誘、先生と三人参り、帰リ七ツ時過浜川小店ニテ少々給、

帰ル也。

同 二日 晴 朝六ツ時御門出致し、小笠原候御内・鈴木彦之進へ、谷作七同

伴ニテ入門・兵要録聞書初ル。八ツ時前昼飯主従へスエ来リ所望致ス也。

夫ヨリ日本橋近辺へ参り、大通リヲソロソロ帰ル。此日は藤村ノ舅桑瀬氏

当地出足ニテ、小屋へ暇乞ニ参り候由ニテ、酒肴其儘ニ致し有之、即チ寝

酒ニ給ル。

同 三日 曇 門出も不致。何角始末方ノ物有之。取片付候内、藤村ハ高先・

田七、と測量ニ参、跡へ伊勢藤之使来リ、此間已来ノ仕切、七兩と四百文

相渡ス。又藤村ノ分も被頼ニテ、沓両沓朱三朱と三百文相渡し濟。別ニ

品覚書ニ受取判形有之也。八ツ時頃ヨリ雨ニ相成、此日御扶持米渡リニ

テ、十月・十一月二ヶ月ノ分吉米丸二俵と八升五合受取。八・九二ヶ月ノ

分ハ、九斗也。大ノ月と小ノ月とニテ相違有之也。此夜野市平次出足ニ

付、書状相頼百文銭二枚遣ス也。

同 四日 朝五ツ時頃ヨリ晴、此日賄銀渡ル様子申来リ候ニ付、藤村と連名ノ

受取書相認、田中ノ家来幸平・上御屋敷へ参ル序、一所ニ相頼也。善藏御

暇ニテ今日出足。小屋へ懇ニ来リ候テ、内へノ状頼ミ百錢沓朱遣ス也。御

賄銀老人前主従二月分沓朱と五百五十也。慥ニ受取、此日眼鏡調ニ行。新

明前小山清兵衛方へ参り、大ノ分沓朱・中三歩沓朱・小沓朱式朱、他二瑠

璃沓朱也。然ニ目ニ合不申候時は、幾度ニても取替申筈。

同 六日 曇 五ツ過ヨリ雨ニ相成風添。此日事有之他出も不為、状杯認居。

昼過高村小屋へ参り困碁。暮合前二人ノ僕相手煎物ニテ飲居候所、田村小

屋ヨリ呼ニ参り、受宜肴ニテ余程給。夫ヨリ又高村へ惠三郎兩人ニテ先生

ヲ送り、又困碁ニ相成、深更ニ及ビ寝ル。

同 七日 日和ニ相成、日ノ出過自分小屋へ帰り、茶漬等給居候処、五ツ時地

震余程久敷して治り、内へノ状段々認、高村小屋へ参り風呂ノ湧ク間困

碁。七ツ過頃ヨリ小屋へ帰り、内へ下ス品拵申候。此日終日甚暖氣、此夜

も高村ニテ泊り候所、夜半過ヨリ風ニ相成。

同 八日 晴 高村先生・田村(七衛門)・藤村(清八)・山本(安次)一所ニ

測量ニ参り、矢口ノ渡し辺、龍田へも参り、義興朝臣の社の脇に碑あり。

神無月十日新田義興朝臣の

靈祠に詣て侍りてよみて奉る。

今日といえハ 思ひぞ出る玉川の
流のすえに残す言の葉

義章

父のその手向おさける言の葉を
千とせの後に残す石ふみ

蘭山伊藤世雄謹書

見物終り門前ノ店にて昼支度致し、野合測量仕掛り、池上本門寺工登り、
日暮頃御屋敷へ帰ル。

同 九日 晴 朝五ツ頃ヨリ鈴木(彦之進)へ稽古ニ出掛、御上屋敷迄参候
所、谷作七ニ逢承り候へば先生留守ノ由ニテ、日比谷御屋敷へ立寄り暫咄
し居、手島八十次小屋へも参り咄し候内、恒之進(安岡)も来り一所ニ帰
ル。此夜同宿同意ニて逸吾杯呼酒飲、終ニ高村小屋エ参り寝ル也。

同 十日 晴 大北風ニテ門出も不為、書ヲ読、或高村小屋へ参り、囲碁交々
ニテ、日暮頃ヨリ酒ニ相成、四ツ頃帰リネル。

同 十一日 晴 藤村氏同道ニテ、鈴木彦之進へ参り候処、折柄留守ニテ、切通
しのこのこ来り珍敷見せ物杯見物いたし帰ル。

同 十二日 晴 此日ハ兼テ高村先生・田村氏(七衛門)・恒之進(安岡)・藤村
氏(清八)一所ニ沖へ参り、大森沖ニテやとい入ノ漁師、メナダ三尺近キ
ヲ四本獲物致し八ツ頃帰り、小屋ニテ料理、日入前ヨリ五ツ過迄飲、帰
ル。

同 十三日 晴 藤村氏同道ニテ鈴木氏エ参り、此日藤村氏入門也。一所ニ稽古
致し夜ニ入帰ル。

同 十四日 晴 麻布ヒガクボ小笠原様御内、桑野徳左衛門へ、鈴木(彦之進)
ヨリ掛合呉有之二付、藤村一所ニ初テ参り稽古致し、日暮頃帰り少々飲、
寝ル。

同 十五日 晴 朝承候所、御飛脚立と申ニ付、取急内へノ状相認、馬藏ニ鎗ノ
仕替ニ致し候を為持、上御屋敷へ遣ス。夫ヨリ恵三郎(田中)来り高村へ

参り、昼飯ニ小屋へ帰り居候所、四ツ過頃、永田友之介・岡田猪藏(以藏)
当着也。九月廿日立ノ由、猪藏ヨリ留守ヨリノ状届呉レ好音、承安。此日
弥作トウジノ酒ヲシボラセ、高村小屋へ為持、藤村一所ニ其世話致し、田
村七衛門・田中恵三郎も来り、一同賞翫、随分出来宜キ也。

同 十六日 曇 此日ハアザニ拍子不宣、他出もせずチリチリ用事有之候テ、七
ツ頃もはや刻限と存じ候所へ、池ヨリ被呼面白給ル。

同 十七日 晴 鈴木へ稽古ニ参り、日暮頃帰ル。

同 十八日 曇 藤村氏一所ニ桑野へ参ル。此日茶一餐、菓子一包、兩人土産ニ
スル也。

同 十九日 雨合羽ニテ 桑野へ行。日入頃帰り田中小屋ニテ五ツ過頃迄飲。夫
ヨリ高村小屋へ参り少し囲碁。四ツ過ぎ帰ル。

同 廿日 雨 休ミ。写本等致し、纒(マユ)ニ晩方酒ニ成ル。

同 廿一日 晴 大風寒氣ニテ、桑野へ参り晩方帰ル。

同 廿二日 曇 藤村一所ニ鈴木へ参り、此日ハ稽古隙取、帰掛日比谷へ立寄、
刻ヲ取首尾付候処、出来がたく由ニテ、又々上御屋敷へ参リテ、刻を取夜
ニ入、五ツ半時帰ル也。

同 廿三日 曇 藤村一所ニ桑野へ参り、此日谷作七も桑野へ来り一所ニ稽古致
し、七ツ時頃ヨリ帰候所、田中へ高村先生被参候由ニテ呼ニ来り居。直様
参り、五ツ時迄給、帰リネル。

同 廿四日 晴 写本浹洽スル筈ニテ他出セズ。夜ニ入田村小屋へ参り大飲。

同 廿五日 晴 他出セズ写本致し、伊勢屋藤三手代来り、注文ノ羽織出来ニテ
持参。表ハ綾金巾・鉄納戸染・五ツ所紋付・裏の引廻し之へ、空色海氣ヲ
通し、仕立料共金壱両式朱と七厘三分也。

同 廿六日 曇 朝五ツ時ヨリ藤村氏ト一所ニ行、谷作七も来り居候。稽古中雨
ニ相成帰路難儀。同所ニテ傘ヲ借ハタシ、二本榎ノ辺へ来り終ニ駕ヲ買帰
ル。風ヲ見テ帆ヲ造うと、賃錢七百也。

同 廿七日 晴 少々風心地ニテ他出セズ。写本浹洽ニテ七ツ時頃迄案上。夫ヨ

リ田中小屋へ酒肴ヲ為齋、夜ニ入田村小屋へ参小酌。夫ヨリ帰り寝ル。

同廿八日 曇 今日も他出セズ写本。此日猪野半平方へ悦ニ被案内、一同申合樽肴料として一包遣し、暮合過ヨリ一同参り酒宴、初テ発声スル也。

同廿九日 晴 此日も御門出不為、写本いたし居。八ツ頃田村小屋へ高村先生被参、囲碁最中ニテ参り、日暮頃帰り生魚五ツヲ為持田中小屋へ参り候所、此日初テ手酒シボリ候迎馳走ニ合、節酔ニテ五ツ時過帰ル也。

同 卅日 曇 此日も右同断。写本。米沢山ニ付大津屋へ遣ス。一両ニ付七斗八升也。

十一月朔日 晴 右同断。晚方恵三郎手酒ヲ為持来り給居、終ニ高村小屋へ参り又酒ニ相成り、囲碁交テ帰。北条流ノ調練足軽小頭被仰付也。

同 二日 晴 右同断。高村ノ大砲調練ニテ、当御屋敷ニテ野戦手継致し晚方帰ル。

同 三日 上御屋敷へ。小頭御用^{かたがた}旁参り、帰り掛夜ニ入、道筋ニテ少シ興あり、五ツ時前帰ル。

同 四日 晴 大砲手継ノ定日ニ付、御場所工出勤。手継済ヨリ浜川御台場へ先生初・仲間・御足軽一統参り測量仕、晚方先生小屋ニテ酒ニ成。

同 五日 藤村風邪ニテ、老人桑野へ稽古ニ行。日暮頃帰り候所恵三郎(田中)・文三郎(山崎)来り居、一所ニ酒初り居候テ給ル。

同 六日 晴 於築地御屋敷、調練ノ下稽古ニ付、出張候様御目付ヨリ申来り、一統参り夜ニ入帰ル。

同 七日 晴 久振ニ藤村一所ニ鈴木氏へ当稽古ニ参り、戻り掛ケ、井伊様御屋敷拜見。夫ヨリ所々廻り終ニ高輪ノ獅子屋へ立寄賞翫、節酔ニテ少々相調、又、七衛門小屋へ持参煮食仕候処、初テ国許ノ味ニ相成申候。此日鍋島様上屋敷焼。

同 八日 晴 又々築地御屋敷へ。内調練ニ罷出候様被仰付、一同参り乾小屋ニテ備ノ図杯見候場合、中橋ノ通り、二丁出火、直様火事場へ参り致見物候所、中々夥敷人数テニテ、且町々諸屋方方ノ人数馳セ違ヒ、御郭中ニ

ハ、ソコココ御大名様御装束ニテ、御人数引、御出馬も見受、江戸ノ名物初覽、九ツ時半ヨリ、暮六ツ迄焼シヅマリ申候。夜ニ入帰り、少々酒肴ヲ為持ニテ、藤村一所ニ恵三郎小屋へ参り、快酔、少々サワリ杯言。帰り寝ル。

同 九日 晴 麻布山内様御屋敷ニおいて、内調練有之出張、八ツ頃ヨリ雨ニ相成、日入前帰ル。此日内ヨリ九月廿三日ノ状達ス。

同 十日 晴 御国許へノ状認。晚方田村小屋ヨリ呼ニ参り、直様立越久敷飲居帰ル。

同 十一日 晴 此日も所用有之他出せず。恵三郎呼ニ遣し候所留守ニテ、藤村と一所ニこんだて飲寝ル。

同 十二日 晴 御定日ニテ、山之内様御屋敷出張。三度備立調練有之。七ツ過済帰ル。

同 十三日 高村先生測量ニ隨身致し、七ツ時帰り恵三郎方へ先生一所ニ参り、酒ニ相成。五ツ時過又右先(高村先生)へ参り少々給。夫ヨリ帰り候処、

同宿兩國・浅草辺へ見物ニ参り帰足ニテ、能ききげんニテ一所ニ寝ル也。同十四日、廻番当り勤メ中、浜川御台場ニテ、大砲調練有之出席。日入前相済、

高村(造酒丞)・田村(七衛門)・田中(恵三郎)待受飲。同十五日 晴 先生(高村)隨身目黒ノ方へ測量ニ参り日入頃帰り、高村小屋ニテ初り、此夜即興ニ点取ノ歌、段々出来ル。

同 十六日 田中恵三郎一所ニ御台場迄大砲打方ノ儀ニ付、先生へ迄隨身ニテ参り、帰ニ大津屋ニテ先生へ馳走ヲシ、又七平(山崎)小屋へ寄りこん立ル。

同 十七日 築地内調練へ出張、夜ニ帰ル。同 十八日 晴 大森御台場ニテ、真田様大砲ノ御稽古有之。先生へ恵三郎一所ニ隨身ヲ以、大森御台場へ拜見ニ参り、夫ヨリ内ノ御台場(浜川)ニテ、

御箱打方詮義中ニテ、帰り恵三郎と仲間ニテ、先生を内ノ小屋工案内飲。此夜段々狂歌出来ル。

同 十九日 晴 兼テ上御屋敷ニテ、備立内稽古(拔隊^{バツタイ}ニ操練ノ事)手合致し

有之所、俄ニ築地ニ相成候段承り、直様参り七ツ過迄稽古致し、刻ヲ取帰ル。此日道筋ニテ少々見物有之也。

同 廿日 前夜半頃ヨリ大風。昼頃ヨリ御台場へ一同参り、野戦手継有之。帰り候テ先生小屋へ参り酒ニ成ル。

同 廿一日 灸治ニ南天屋へ参り、惠三郎と七衛門小屋へ砲術詮義へ参り候所、病氣ノ由ニテ空敷日暮、終ニ先生ヲ迎、飲ム。

同 廿二日 御定日ニテ(御流義稽古日)、麻布御屋敷調練ニ参り、日入頃帰リ少々飲ム也。

同 廿三日 廻番当番ニテ、火消装束ノ襟祝。御台場へ先生・七衛門・清八御筒ノ台ヲ見合、此日大寒、風呂浴ヨリ帰り先生小屋へ被招飲ム。

同 廿四日 晴 築地へ調練ノ下稽古ニテ参り、往返共節酔ニテ帰り、先生ノ小屋へ又参り、少し給、帰り寝ル。

同 廿五日 晴 日比谷御屋敷へ。御小屋替え願書、恒之進(安岡)へ出し呉候様頼置也。

同 廿六日 晴 築地御屋敷エ内調練ニ参り、夜ニ入り帰り、内ヨリノ状到達ス。夜半頃ヨリ雨。

同 廿七日 雨 久振ノ潤ニテ宜。書状相認可申と構候場合、惠三郎来リ昼前ヨリ吞出し、夫ヨリ田中小屋へ参り、先生囲碁中ニテ色々勝負致し、又こん立夜ニ入迄給、帰ル。昼頃ヨリ日和ニ成ル。

同 廿八日 晴 築地内調練ノ補申来候へ共、病氣ヲ届、出勤不致、一日状を認ル。夜ニ入、同宿と酒ヲこん立、惠三郎呼ニ遣し候所七衛門一所ニ来り献酬中、光馬(猪野)・清五郎(野島)も来り、四ツ過迄大飲也。

同 廿九日 晴 宿醒ニテ五ツ時迄寝。夫ヨリ大砲定日ニテ、先生外仲間一所ニ御台場へ参り、稽古。七ツ過迄帰ル。猪野光馬ヨリ被招参り飲ム。

安政三年十一月二十九日

(安政三年十二月一日)

十二月朔日 晴 藤村(清八)と馬蔵(孫六家来)ヲ買物ニ遣シ、一人内ニテ終日状ヲ書。

同 二日 晴 大風 麻布御屋敷調練定日ニテ、早朝ヨリ出勤。七ツ過帰リ掛葛屋へ八人連ニテ立寄 夜ニ入帰ル。

同 三日 晴 廻番ナレ共、天気穏ニテ終日門出不致。藤村氏ハ先生と測量ニ行。

同 四日 晴 上御屋敷エ状ヲ為持遣候所、御飛脚御日延ニ成ル。此日御台場ニテ、野戦調練ノ日ニ付出勤、夜ニ入田中(惠三郎)・高村(先生)ニテ飲。

同 五日 曇 両国橋ノ向キ、えこういん(回向院)ノ角力見物申合、田七(田村七衛門)・藤清(藤村清八)・田惠(田中惠三郎)・自分(岩井孫六)四人連ニテ、六ツ時(午前六時)出足ヲ以参り、四ツ過頃(午前十時)ヨリ見物、御国許と違大男ニテ随分面白、扱九ツ頃(正午頃)ヨリ少々雨ニ成候へ共、八ツ頃(午後二時頃)ヨリ上リ難義なし。日入頃帰り吞。

同 六日 晴 築地内調練ニテ五ツ頃ヨリ参り、帰り掛ケ道筋三人連ニテ吞ミ、夜五ツ半時帰り寝ル。

同 七日 雨 内へ遣ス物、且角力付等認居、四五人連ニテ入湯ニ参り、高村小屋へ参り猪光(猪野光馬)・山文(山崎文三郎)入門ニテ為持ノ樽開、相伴スル。

同 八日 晴 此日も内へノ品拵候所、砲声頻ニ聞へ出掛候場合 御目付御台場へ来り候ニ付参り居、帰り掛同宿と蕎麦喰ニ参り、日入前帰り、足輕伊平・高先・猪光呼ビ吞、寝ル。

同 九日 晴 四ツ前頃(午前十時頃)ヨリ灸治ニ参り、夫ヨリ昼頃帰り、御台場調練ニ参り、同宿ハ馬藏連テ上御屋敷へ参り、此日願書出しかえる。

高村ニテ晚景入湯、夫ヨリ田七・田惠一所先生ニテ吞帰り寝ル。

同 十日 晴 早朝少々雲、昼過ヨリ迎へ灸ヲ致し、晚方蕎麦取ニ遣し、肴ニして吞寝ル。

安政三年十一月二十九日

(安政三年十二月一日)

同十一日 晴 此日廻番ノ処操合貫、先生と猪野光馬同道ニテ目黒ノ方へ遊ニ
参り候所、池源六・秦泉寺永衛も参り居一所ニ相成、興ニ成日暮頃帰ル。
又先生ニテ少々給帰り寝ル。此日はづみニテ馳走スル。此日留守ヨリ状届
ク。

同十二日 晴 大風、麻布調練御定日ノ所、病氣ニ付、出勤相調不申、内ニテ
終日何も不為、温火ニアタル。

同十三日 晴 書状等相認。晩方高村先生へ被招、同宿(藤村清八)・田村七
衛門一所ニ参り吞。同宿と中間ニテ蕎麦贈ル。

同十四日 晴 惠三郎・同宿と三人連ニテ江戸前へ参り、日比谷御屋敷田中嘉
右衛門小屋ニテ逢馳走ニ、日暮頃帰り、山崎七平小屋へ被招余程吞、終ニ
一同及発声面白、四ツ前(午後十時前) 帰ル。

同十五日 晴 此日山崎元右衛門出足前勤ニ来り、直ニ見立(見送) 呉候様来
遊ニ付、藤村と仲間ニテ樽肴贈り、夫ヨリ数人首途ノ酒宴。昼前ヨリ八ツ
過頃迄吞候テ出足。大森迄参り料理屋エ立寄り無程七ツ時頃相別る。

同十六日 晴 惠三郎方少、子細有之昼頃ヨリ酒ニ相成。夫ヨリ八ツ前頃田七
(田村七衛門)・藤清(藤村清八)・田惠(田中惠三郎) 一所ニ御台場へ参
り、七ツ頃ヨリ入湯ニ行。帰掛又少々給 日入頃帰ル。

同十七日 晴 書状相認。馬藏上御屋敷へ遣し、晩方休養中田村小屋ヨリ呼ニ
参り、夜五ツ頃迄(九時頃迄) 吞ミ帰り寝ル、此夜大雪、暁迄深サ三寸計
り積。

同十八日 雪ヨリ雨ニ相成。初雪ノ気色甚宜。四ツ時頃(午前十時頃) 田村小
屋へ藤清・田惠一所ニ参り雑談。囲碁終ニ七ツ頃(午後四時頃) ヨリ夜四
ツ時(十時) 迄酔談ニテ帰ル。七ツ頃ヨリ天気ニ成ル。

同十九日 晴 大風 廻番相当り勤中、大砲稽古御屋敷内ニテ空発。此日内ヨ
リ大人様、母上様、新宅、妻父様ノ状相達。日入頃先生ヨリ呼ニ来り参り
候処、少認物有之、水風呂有之、湯上リヨリ酒ニ也。五ツ頃迄吞、入札ノ
祝也。

同 廿日 晴 同宿八田七、山七同道ニテ、買物ニ行。馬藏も伊勢藤ヨリ、上
御屋敷へ遣ス。

同廿一日 晴 早朝内ヨリノ状。恒之進(安岡) へ頼来候由ニテ相達。日付な
し。多分十一月廿五日出と相見申候。此日御屋敷内ニテ、野戦早打。七ツ
頃(午後四時頃) ヨリ浜川御台場へ一同参り日暮帰り、高村小屋へ酒肴持
参、終ニ深厚ニ及迄先生ノ伽致し、田七、田惠一所ニ九ツ頃(深夜十二時
頃) 帰り寝ル。

同廿二日 晴 大砲試前ニテ、先生小屋へ段々集り何角多忙。夜ニ入り仕事片
付酒ニ成。九ツ時前帰り寝ル。此夜六ツ時半頃ヨリ大雪ニテ、見る内式三
寸も積申候。夜明迄降り壹尺程(約三十三^{センチメートル} 糶) 積、初テ此程ノ雪ヲ見
申候。

同廿三日 曇 高村小屋へ参り何角手伝。昼過頃田村小屋へ参り居候所、先生
見へ囲碁ニ相成。晩方七衛門蕎麦取ニ遣し酒ニ成。惠三郎・七平来り四ツ
過頃迄吞帰ル。前夜ヨリノ雪ニテ、大砲試打廿四日、廿五日御日取ノ所、
一日延引相願、五日六日ニ相成ル。

同廿四日 高村何角世話敷、寒氣濟々身ニ覚申候。終日手伝。夜ニ入風呂ニ
入、田中小屋ニテ飲居候処、先生ニ被呼又々参り、四ツ前迄吞帰寝ル。

同廿五日 曇 雪未融。六ツ時(午前六時) 先生隨身ニテ、大森町御打場へ参
り、何角拵隙取、無程八ツ時頃ヨリ打初ル。二十四斤・二百目野戦打、
日暮頃仕廻、公辺陸目付(幕府陸目付) 迄立越、此日寒凌ニ少々乍二度酌、
帰り候テ又少々吞寝ル。夜半頃ヨリ大風ニ成。

同廿六日 晴 日ノ出頃ヨリ右御場所へ立越候所、大北風ニテ砂ヲ飛し目口へ
入り難忍。余程拵ニ隙取、九ツ時頃(正午頃) ヨリ打初 日入ニ済ム。時
に業前見事也。殊ニ野戦ハ公辺御役人ヨリ(幕府御役人) 所望有之快発
也。夜ニ入先生立宿へ引取り酒宴。賑々敷発声五ツ頃(午後八時頃) 帰り、
又先生小屋へ献立廻り、浄ルリ求ニテ、四ツ半過帰り寝ル。業前打人数、
中^{あた}り付等別ニ有リ。

同廿七日 晴 天氣穩・内へノ状少々認。日暮頃田中ノ小屋ニテ少酌、又内ニテ主従四人少々呑寝ル。

同廿八日 晴 天氣穩。朝先生ヨリ呼ニ被差越、終日高村ニテ帳面、書状相認。夜二入、「結」頼とて先生ノ小屋ニテ酒宴。四ツ前帰り寝ル。

同廿九日 晴 帳面且内へノ状相認。晚方ツタ屋(葛屋)へ同宿(藤村清八)・

田惠(田中惠三郎)一所ニ参り吞。

同卅日 大風 内へノ状封じ。先生、田惠、猪光同道ニテ市中へ参り、川崎屋へ立寄候所強テ面白無御座候ニ付、直様立出葛屋へ参り、年忘レニ大のれ。夜二入帰り野島小屋ニテ再酌。又先生自分ニ呼ニ被見、又同宿・田惠一所ニ参り小酌。四ツ過(午後十時過)帰り寝ル。

安政四年巳正月元日。

元日 晴 早朝嘉例ノ通り朝祝・氏神様・御先祖へ遥拝し、夫ヨリ御屋敷内稲荷様・観音様へ参詣し、小屋小屋工年賀ニ参り、夫ヨリ同宿ヤクハネ(厄年濟)ニ付申合、田村小屋ヲかり祝宴。四ツ時濟帰り寝ル。富士ノ夢ヲ見ル。

同 二日 晴 先生へ年賀ニ参り御祝、初御馳走ニ逢、其きげんニテ外輪へ見物ニ参ル申合ニ付、装束ノ段六つケ敷、同宿と自分、先生ノ着用借用。カヒツリノ袴ニ変わらずとて大笑。狐ノ嫁入りニテ御座候。八ツ時頃ヨリ高輪町迄参り候処、市中只チク突賑々敷、帰り掛葛屋へ立寄り大ノレ。帰り五ツ頃ヨリ寝候所、夜中大雪ニテ、朝景色よろし。先生隨身ニテ御屋敷之後口ヨリ測量ニ参り 八ツ前帰ル。

同 三日 晴 大雪景色よろし。九ツ前(正午前)ヨリ御屋敷ノ後口へ先生隨身ニテ測量ニ参り、八ツ時(午後二時頃)頃帰り、高村の風呂ニ入り囲碁。夫ヨリ猪野半平年日祝連一同へ案内有之、日入前ヨリ参り五ツ頃迄呑、少々発声も致し帰り寝ル。

同 四日 晴 当春ハ、大守様御不例(病氣)ニ付、御目見ノ立リニ被仰付、

当日深尾丹波様へ罷出候様被仰付。駿斗日装束を以、御屋敷へ手札(名刺)を以相勤ル。夫ヨリ日比谷御屋敷恒之進(安岡)・安次(山本)杯小屋へ参り、年賀申入候所、杯出し同宿(藤村清八)と一所ニ暫馳走ニ逢。七ツ少過(午後四時)出足。又々一寸道寄致し夜二入帰ル。此日内ヨリノ状達ス、十二月二日、同十一日ノ状也。

同 五日 曇 内へノ状相認可申と急候所へ、御手廻り惣次来リ杯致し八ツ頃帰ル。為年玉唐羊羹到来。且大津屋五兵衛も年賀ニ来リ、品川海苔一包到来也。晚方外輪へ遊二行。

同 六日 晴 内へノ状終日相認。日暮前先生被見咄ニ参り候様御噂ニテ、猪野光小屋ヲ吞出ニ致し、先生小屋へ参り、五ツ過頃藤清、田惠一所ニ帰り田中小屋ニテ寝ル。

同 七日 曇 内へノ書状封じ。同宿ハ惠三郎と江戸へ行。祝ニテ先生ヨリ呼被差越、認物相済水風呂ニ入、夫ヨリ御台場へ行。

同 八日 晴 此日他出せず。田中小屋へ参り、咄ノ内囲碁ニ相成、晚方惠三郎少々酒肴取寄、同宿と三人吞。

同 九日 晴 池(源六)・山崎同道ニテ、神明前稽古角刀見物スル。随分面白キ也。日暮少シ過帰ル。

同 十日 晴 此日買物有之、同宿・田惠一所ニ新橋辺エ参り、帰掛愛宕下弘小路ニテ、手づま杯(手品杯)見物し帰り、田中(惠三郎)小屋ニテ吞居。高村小屋へ又参り吞帰り寝ル。

同 十一日 晴 同宿(藤村)・田七(田村七衛門)・田惠(田中惠三郎)・山七(山崎七平)一所ニ土橋女芝居ヲ見物ニ参り、日暮頃帰り田惠ヲ招吞寝ル。

同 十二日 晴 同宿ハ猪光と渋谷へ参り、此日己屋替致し、高村・田七・田惠悦到来ニテ酒宴賑々敷、四ツ頃濟寝ル。

同 十三日 曇 此日廻番、風弱廻りなし。前夜ごきげんニテ九ツ時頃ヨリ雲直し(二日酔醒さまし)連、田七・田惠参り、追々光馬も参り吞候内、御足

輕堅助も呼来り、夜二入迄且談、且酌、狂歌拵致し、堅介ヨリ酒肴到来也。

五ツ頃迄咄し寝ル。此日大廻り荷物一つ取寄ル。

同十四日 晴 此日も先生・田七・田恵と囲碁二相成居候内、シコノヌタ出来少々吞居、先生小屋へ又参り、色々好看出来居、四ツ前頃迄給帰ル。

同十五日 晴 鈴木先生へ年賀ニ参り、二朱壹封・鯉節三本年玉ニ贈ル。夫ヨリ上御屋敷へ御用懸りを以立寄り、猪野両家（半平と光馬）ノ紙面御目付所へ差出ス。帰り掛少々見物致し、蔦屋へ立寄、先生一所ニ給帰ル。

同十六日 晴 築地御屋敷内訓練ノ御定日ニ付、田七（田村七衛門）同道を以出勤。寒氣・大風難堪、七ツ半（午後五時）右御屋敷出門、田町ニテ入湯。

猪光も一所ニテ終ニ高輪ノ金萬へ立寄り小酌、常盤津抔、五ツ時前御屋敷ニ帰ル。

同十七日 晴 朝先生被見、田恵も来り、追々七衛門も参り囲碁二相成、昼迄勝負。髪・月代拵致し御門出致し、暮合過帰り、田村小屋へ被呼、少々給帰り寝ル。

同十八日 晴 鈴木ノ初会（稽古初め）ナレドモ不工面ニテ、得被不参、同宿ハ弥作ヲ連レ、「坂本」へ参ル。昼頃ヨリ恵三郎と大森梅屋敷へ参り、道ニテ少々給帰り候処、同宿も帰り候場合、又少々給寝ル。

同十九日 御台場大砲訓練ノ初会ニテ出張。八ツ頃帰り先生小屋ニテ、恵三郎一所ニ囲碁。夜二入先生ヨリ呼被差越、五ツ過頃迄吞帰り寝ル。此日大廻りヨリ炭取寄ル。

同 廿日 晴 同宿は恵三郎と江戸前へ買物ニ参り、老入内ニテ具祝拵致し、先生・田七見へ囲碁二相成り居候場合、山本安次来、晩方先生小屋へ田所先生（左右次）被見候呼ニ参り、一樽と蜜柑贈り、七ツ過ヨリ夜五ツ頃迄吞、大酔ニ成帰り寝ル。

同廿一日 曇 川崎大師様へ北代覚介より被誘、大先生・野島（清五郎）・□□一水一所ニ参り、梅屋敷ニテ見物中程地震、夫ヨリ川崎宿ノ辺ヨリ雨少々降出し、参詣ノ場合止り居、料理屋ニテ酒中、又々雨ニ相成五人駕

籠ニ乗、夜二入り五ツ時御屋敷エ帰り寝ル。翌廿二日ノ訓練延引ニ成、内ヨリ十二月廿五日、及正月元日ノ状達ス。

同廿二日 曇 早朝ヨリ状認ル。晩方入湯ニ行。夜二入内同士吞。

同廿三日 晴 同宿ハ猪光と「坂本」へ行、自分ハ老入早朝ヨリ状ヲ認候所へ先生見、田七を招囲碁、其脇ニテ數十通相認め、日暮頃先生へ被招、田恵、同宿と三人参り五ツ頃迄給帰り寝ル。

同廿四日 晴 早朝ヨリ状ヲ認居候処、先生、田七と囲碁。晩方被帰、日暮頃蕎麦ヲ取寄少々給。夫ヨリ又状を書、終ニ八ツ時（午後八時）前迄ニよふよふ封し上寝ル。此夜大雪也。

同廿五日 前夜ヨリ降繼大雪ニテ、又々少々状ヲ認。八ツ頃ヨリ先生・同宿・田恵一所ニ三浦屋エ保養ニ行。夜二入帰ル。

同廿六日 晴 大守様俄ニ御遠馬懸り、御台場・当御屋敷へ御入被遊、日入頃上御屋敷エ御帰館。此夜先生御獲物ノ鳩頂戴被致、右ニ付被招候テ吞帰ル。

同廿七日 晴 神明前辺エ買物ニ行。山七（山崎七平）と一所ニ成、帰り掛道筋ニテ一寸給、夜二入帰ル。

同廿八日 晴 同宿・田七一所ニ又々買物ニ行。日暮頃帰り、内ニテ少々吞寝ル。夜半頃ヨリ大風也。

同廿九日 晴 大風高村小屋へ参り、田七、田恵一所ニ囲碁ニ相成。暫して帰り大廻（土佐行の大廻船）へ積立ノ荷物拵、又晩方高村小屋へ参り居入湯致し、直ニ酒ニ相成、夜五ツ時過帰り寝ル。

安政四年二月朔日

二月朔日 晴 大風 同宿ハ猪光と師家へ参り候跡ニテ、高村小屋へ参り田七・田恵も参り囲碁ニ相成。実は当日他出ノ筈ニ御座候処、宿醒心地ニテ止メ保養スル也。

同 二日 晴 御台場ニテ訓練被仰付、九ツ時ヨリ、御上覽被仰付、一同首尾

能相濟。八ツ時少過相濟御殿へ御入被遊、夫ヨリ大森梅屋敷へ御出被遊。此夜ヨリ大雪也。

同 三日 降り継大雪ニテ、昼過頃ヨリ外輪へ他出ヲ以遊ニ参り、日暮テ帰ル。

同 四日 晴 髪・月代致し、高村ノ風呂へ参り、追々同宿・恵三郎も来り一所ニ囲碁。晩方ヨリ不図悪寒、此夜田村へ先生招請ニテ被招 参り居候処難堪、断言テ先キへ帰り寝ル。此夜ヨリ風邪ニテ熱も有之伏枕、尤南天屋ヨリ服薬三丁求来り服用。

同 五日 晴 平臥ニテ、終日書見杯ニテ相濟。

同 六日 曇 同宿(藤村)は猪光(猪野光馬)と師家へ参り、先生(高村造酒丞)・田七(田村七衛門)・田恵(田中恵三郎)来り囲碁。昼ヨリ帰り伏枕。蕎麦杯取寄、同宿帰ルト少々酒給寝ル。此夜ヨリ又々雪也。此日菊地屋来り、させる三本ニテ式歩也。外ニかんざし一つ、どふじめ一つ注文する。どふじめ一つ取巻歩也。

同 七日 雪・霰・雨交々ニテ、此日も未ダ伏枕。同宿ハ高村へ地雷手伝ニ行。晩方返ル。赤沼国手(名は節山・田村猪之助の師)山崎へ来り居、呼ニ遣し見貰、薬式服もらい服用す。

同 八日 晴風、同宿ハ恵三郎と高村へ手伝ニ行候ニ付、退屈ゆへ、跡ヨリ自分も参り少手伝見候へ共、何分心地十分ニ無御座ニ付、直様返り温火ニテ寝ル。昼頃赤沼見合ニ来り、又々薬五服くれる。恵三郎と昼ヨリ碁ニ相成、七ツ時頃迄勝負。夜ニ入田七も呼酒ニ相成候テ、被進試ニ少々給候所、随分受工合宜、四ツ時前寝ル。

同 九日 晴 もはや大方平快ニ相成候へ共、此度ノ外邪ハ市中風呂屋杯、湯入甚乏候由。尚為念ニと存じ厚保養ヲ加へ居申也。此夜恵三郎酒肴為持来り、田七ヲ呼四人歎醉、四ツ前頃ニ返り寝ル。

同 十日 晴 同宿も風心地ニテ伏枕。自分も高ハ過候へ共平癒ニ無御座、あしらい居。晩方九平勤ニ来り一寸帰り、再来ノ節小鳥ニ羽持参、肴ニして

と存じ候所へ田七呼ニ越シ、同宿・田恵一所ニ参り酔中、西川ノ足輕(行宗桃源の足輕)仲次と申人来り、ノレニ相成、四ツ過頃迄余程呑寝ル。

同 十一日 晴 書状相認メル。弥作(山本安次家来)ヲ麻布桑野氏へ、先達テ借り居候書ヲ為持返。且兩人して式朱ヅツ贈ル也。

同 十二日 晴 馬藏病氣ニ付、弥作(山本安次家来)を相談致し、鈴木氏ヨリ上御屋敷へ遣し、御飛脚便ニ相廻り居候金子三十兩、上封小牧曾左衛門包受取来ル(小牧曾左衛門は安芸土居付家老五藤家騎馬、岩井孫六の類族)。此日高村へ手伝ニ行。

同 十三日 南風吹、暖ニテ御飛脚立ニ付、早朝ヨリ昼迄状認。御陸目付へ頼、昼過ヨリ高村エ手伝行。晩方囲碁ヨリ酒ニ成、此夜小雨。

同 十四日 曇 少々何やら降。朝ヨリ高村へ手伝ニ行。晩方又々囲碁ヨリ酒ニ成、夜ニ入五ツ時頃帰り寝ル。

同 十五日 晴 朝ヨリ高村へ手伝ニ行。晩方例ノ通り囲碁ニ相成、勝負済ヨリ酒ニテ、夜五ツ頃迄呑、帰り寝ル。

同 十六日 晴 朝ヨリ高村エ手伝ニ行。昼過水風呂為湧入り、七ツ半頃囲碁ニテ仕合宜。夜ニ入田七(田村七衛門)呼存。

同 十七日 晴 采女原ヨリ諸方遊覧。田七・田恵一所ニ参り暮頃帰ル。内ニテ少酌。

同 十八日 晴 高村へ手伝ニ参り居、晩方、田恵と囲碁ニ成。終ニ高村ニテ酒ニ成り、夜ニ入帰ル。内ヨリノ状相届。正月廿六日認ノ状。

同 十九日 晴 早朝ヨリ高村へ手伝ニ参ル。晩方馬藏召連、外輪へ遊ニ行。夜ニ入帰ル。

同 廿日 大風 高村へ手伝ニ行。此日上御屋敷エ、金子入ノ封じ物、且具足櫃取ニ遣し、賄銀も取寄ル。壺人ニ付主従式ケ月ノ分、巻歩と四百六拾文也。扱八ツ頃御門前ノ来福寺境内ニ台床有之。先生同道ニテ見物ニ参り、先ヨリ葛屋へ参り夜ニ入帰ル。

同 廿一日 晴 高村へ手伝ニ早朝行。金封ノ内ニ御二方様(十藏夫婦)廉女ノ

状有之。読候所委細左右也。正月二十三日認ル下遣り此度ノ金子貳拾兩也。慥ニ受取置。昼頃ヨリ大井ノ小溝エ先生(高村造酒丞)・永田(友之助)・田惠(田中惠三郎)一所ニイダ(ウグイ)取ニ行。大小共拾五六程取。戻リ掛三浦屋ニテ趣向、日暮頃帰ル。

同廿二日 曇 高村手伝ニ行。同宿ハ上御屋敷エ行。昼頃ヨリ淋敷田惠と相嘶居、八ツ過ヨリ内ノ小屋ヘ呼対酌。日暮頃田七、同宿も帰り五ツ頃迄吞寝ル。

同廿三日 雨 美濃屋来リ紫三徳貳二歩・金具定紋ニして沓歩貳朱・富士ノ金具ニ式歩ノ注文致し、昼ヨリ巻紙杯継、日和ニ相成候所大風吹出し、廻番廻リニテ相勤メル。此日判巾着・根付・緒メ一切ニテ式歩貳朱也。此夜先生小屋エ酒肴到来ノ事有之、被呼此方ヨリも少々酒肴二人して贈、四ツ前頃迄吞、然ニ夜ニ入候ても風治り不申、二度廻ル。

同廿四日 晴 同宿(藤村清八)・田七(田村七衛門)・田惠(田中惠三郎)・山七(山崎七平)・永友(永田友之助)・両国橋ノ下カルワザ(現代のサーカス)見物ニ行。自分ハ鈴木氏エ兵書ノ義ニ付参り、日入頃帰り吞、此夜少々雨降ル。

同廿五日 晴 右兵書写し。晩方入湯ニ参り、三清楼ニテ少々給。暮合帰り寝ル。

同廿六日 晴 兵書写し。図ノ所田七ニ晩方頼、夜ニ入候て田七呼同醉。早く寝ル。

同廿七日 曇 鈴木ヨリ借来リ候調練書(抜隊竜^{バツクイロン}操練書)写。昼頃貝ほりニ先生杯と こん立、大津屋迄出掛候場合、少々雨ニ相成直様立帰り、高村小屋ニテ囲碁。七人ヨリ酒ニ相成、夜五ツ時頃帰り寝ル。

同廿八日 晴 早朝先生、田七へ被参囲碁ニ相成。其脇ニテ写本仕廻、昼ヨリ内へノ状相認ル。田七へ謝礼ニ酒肴贈り、夜ニ入被招参り吞。

同廿九日 書状相認居候処、貝ほり被誘参り、少々取帰り候所、内ヨリ二月七日認ノ状相達・好音。承安此夜高村エ被呼、五ツ時過頃迄吞、帰り寝ル。

同 廿日 晴 高先(高村)誘ニテ、田七・永友・田惠一所ニ、目黒不動尊開帳初リ居候由ニテ参り、祐天寺ノ方へも参り、祐山院様奉始、仙石・寺村杯慕見、帰り掛田中屋と申料理屋ニ立寄り、暮合頃帰り寝ル。

安政四己年三月朔日

同 朔日 晴 御飛脚立御引延ニ付、又々書状相認。此日野島清五郎先達テ、長足流ノ鞍輪製作仕入 御覽御取上ニ相成居候。御会釈として於御用役宅・御軸物式幅・御轡^{おんくわ}一ハミ頂戴難有事也。晩方案内申来リ己屋内申合、悦等遣ス。夫ヨリソロソロ参リ五ツ過頃迄吞ム。

同 二日 晴 書状認残り相認。昼ヨリ御台場内調練ニ出勤。相仕廻ニテ近所ニテ少々興有リ吞デ帰り、又野島へ参リ余程吞寝ル。

同 三日 曇 大風田七(田村七衛門)・山崎(七平)・田惠(田中惠三郎)・猪光(猪野光馬)同道ニテ、洲崎ノ弁天へ参り、花も未開、汐干狩尔来は殊ノ外賑々敷由ノ所、当日ハ風強、汐も程々干落不申候ニ付、甚淋しく、夫ヨリ三十三間堂見物。去秋ノ嵐崩込、未普請出来居不申、深川仮宅杯見物^物ソロソロと帰ル。暮合頃御門入する也。隣小屋来リ居、少々吞寝ル。

同 四日 大風、前日ノ疲レニテ五ツ頃(午前八時頃)迄休ミ、もミヤ。四ツ時頃(午前十時頃)同宿ハ用事有之主従上御屋敷エ行。独り書状相認。晩方七衛門小屋ヨリ被呼、例ノ付合ニテ吞。四ツ時頃(午後十時頃)迄咄し、帰り寝ル。

同 五日 晴 四ツ過頃ヨリ馬藏連、上御屋敷エ参リ長谷川へ(当時格式白札、名勘助)大小ノ拵頼ム。御書指惣次へも礼ニ参り、酒預リ其同宿へ頼置。夫ヨリ帰り掛、土橋ノ芝居見物大出来也。日入頃帰り高村ニテ入湯ヨリ酒ニ成。五ツ頃(午後八時頃)帰り寝ル。

同 六日 細雨 惠三郎来リ囲碁初、七衛門も参リ昼迄勝手。夫ヨリ惠三郎留守ニ鑑節句有之。右心持ノ様子ニテ案内来リ、高村先生・田七・同宿申合樽、肴贈ル。又昼過ヨリ囲碁ニ相成、七ツ頃(午後四時頃)ヨリ酒ニ相成、

夜二入五ツ頃帰り寝ル。

同日 雨 此日も他出せず詩作致し居。昼過頃ヨリ田中己屋へ参り候所、高村先生、同宿も来り、又囲碁二相成。晚方鮭子開迎夜二入迄吞、五ツ頃帰り寝ル。

同日 晴 段々申合、土橋女芝居見物ニ参り候処、薩摩五人切甚面白ク、別テ兼吉と申役者、源五兵衛大当り。晚景日暮頃帰り、同宿と一所ニ吞寝ル。

同日 晴 此日廻番二付門出不致、大森調練也。昼過ヨリ南天屋工灸治ニ参り、廿一穴へ千余リスヘル。八ツ過帰り、久振ニ作詞。夫ヨリ夜二入候テ、恵三郎呼対酌。快酔ニテ寝ル。

同日 晴 処々見物申合、田七・田恵・永友・同宿相誘、日ノ出前出足。

神田ノ方エ参り、聖堂御門内へ入候所被尋、明キ日ニテ無之。直様立出明神宮へ参詣。夫ヨリ湯島天満宮へ参詣。もはや四ツ過東叡山ノ方へ参り候処、名高キ靈場山門ヨリ本堂初、鐘撞堂ニ至迄。美麗ノ結構言計なし。本堂柱ノ廻リ二尋計リ(約三・六米)、両方ノ廻廊板敷ニ至迄朱塗り、御門内ヨリ本堂前ノ人を見るに、二・三歳ノ小児のごとく也。子ノ鳩ハ雀の如く、鴻巣をかけ候処、鳩ヨリ少し大ク相見申候。堂ノ後数十本ノ桜有り。

はしはし開候場合、其美麗画ノごとく、夫ヨリ浅草ノ門迹へ来り、門前ニテ支度致し、鳥ノ芸も見物し、観音へ如々、参り候処、聞しにまさる参詣人。門内両輪種々ノ買物飯店を構居、本堂エ依し左ノ脇ニ、ノゾキ眼鏡・本唐ヨリ和蘭初二国ノ図実ニ奇妙。夫ヨリ生キ人形是亦衆目ヲ驚ス。細工凡人形ノ数六十余リ。其外芝居・軽業種々様々ノ物有之、桜も数百本有共、未開ニて是ノミ残念。且築山杯致し植木・石組等ニテ、もよふ取、酒肴杯かまへ、或ハ揚弓屋杯・懸茶屋ニは二八計リノ女・買茶惣分ノ形勢、実ニ江戸ノ江戸たる処、初テ見物致ス也。夫ヨリ段々店付ノ女郎化粧して店へ出張り居ル。一人も目ニ留ル者なし。是ハ笑止。もはや八ツノ刻限ニテソロソロ帰足ヲ催し、大通りを相誘、日暮頃御門入致、田村小屋へ被呼

快酔。五ツ頃寝ル。尤大草臥也。

同日 晴 前夜ノ草臥ニて五ツ前迄休。少々状杯相認。昼ヨリ入湯二行、序二軍談聞、七ツ頃帰り。夫ヨリ田七・田恵ヲ招夜五ツ少過頃迄吞寝ル。

同日 晴 御定日ノ調練ニテ、日ノ出過御台場へ出張。三備有之。八ツ時頃濟、御小屋へ帰り。

同日 晴 高村へ手伝ニ参り居、昼過頃先生・田七・藤清・田恵・永友一所ニ測量より台神楽見物致し、帰候テ高村へ参り吞

同日 曇 高村手伝ニ参り晚方囲碁。此夜も製薬方御足軽手伝ニ来り居候テ、一所ニ大吞・五ツ過帰り寝ル。

同日 雨 此日も高村へ手伝ニ参り居。晚方大守様御滞府ノ事拝承。夫ヨリ帰り候所恵三郎・七衛門も来り咄し中、蕎麦杯取寄、五ツ過頃迄吞。

同日 曇 高村へ隨身ニテ、池上エことと測量二行。日暮頃帰り、先生ニテ恵三郎囲碁ノ勝負ヨリ酒ニ成。四ツ頃帰り寝ル。

同日 晴 田七・田恵来り囲碁。昼過ヨリ他出を以貝堀ニ参り、夫ヨリ御殿山へ参り候所、桜未開帰り候テ、田村己屋へ集り吞。

同日 曇 四ツ頃ヨリ上御屋敷へ参り、田恵一所ニ相成り、帰り掛土橋ノ辺ニテ相慰。日入頃帰り田七・田恵来り同酔、此日夜へ掛南風強し。

同日 曇 南風強し。大森於御町場、加賀様(前田侯)大砲御試拝見ニ参り、同宿・田七・田恵・永友一所ニ帰り、田村己屋ニテ吞、帰り寝ル。

同日 晴 御飛脚立ニ付朝ヨリ書状相認。昼頃ヨリ少し相談事有之、田村己屋へ参り居、囲碁ニ相成、晚方少々酒肴を以、田中己屋へ例ノ三人・四人集り吞、四ツ頃帰り寝ル。

同日 曇 此日野島エ廻番ノ返番ニ付、御門出不致、同宿ハ渋谷ノ方へ稽古二行。其外大抵川崎大師様へ行。馬藏ハ麻布ノ方へ用事有テ遣ス。晚方

帰り酒肴ヲ贈り足軽市郎平方へ参り、夜五ツ時迄吞居。雨ニ相成帰り寝ル。

同日 雨 昼此ヨリ雨止ミ、扱大津屋へ。安岡覚之助尋来り居候由承候ニ

三篇廻り入湯ニ参り、夜ニ入候テ、田七迎吞。五ッ過寝ル。此日安恒（安岡恒之進）・山安（山本安次）も日比谷ヨリ（日比谷土佐藩邸）又々品川へ戻ル。内ヨリ二月廿五日と、三月五日ノ状達ス。

同廿八日 晴 大風 昼頃ヨリ青山ボ方出火申沙汰有之、見物ニ出掛候所、種々相分り不申、終目黒ノ方へ参り巢渡リ見物し、日暮頃帰ル。

同廿九日 晴 先生初田村己屋ニテ咄中、内へノ状相認畢り、直様参り囲碁ニ相成。山安・田恵も参り居候テ大勝負。昼過頃ヨリ雨ニ成。晩方少々雷鳴。七ッ過少シ酒ニテ先生ノ塩鯨喰ニ参り候跡へ、市郎平ヨリ酒肴贈来り候所、間違を以高村小屋ニテ披露。夫ヨリ帰候所、市郎平来り居。不調子なりニ盃出し酔て帰ル。此日夜須（香美郡夜須村）ノ御足輕五左衛門へ、内へノ状頼ム。

安政四己年四月朔日

四月朔日 雨 少々書状相認居、田村己屋ニテ碁ニ成。昼頃ヨリ日和ニ成ル。

晩方内へ田七待受吞ム。此日七衛門へ頼候量尺出来来ル。八ッ過ヨリ日和ニ成ル。

同 二日 晴 髪月代致し、尾張様御帰国拜見ニ出、昼ヨリ御台場調練ニ参り候へ共、人数少ニテ種々備出来不申。帰掛南天屋へ参り灸治スル。

同 三日 晴 上御屋敷へ参り、尤此日他出を以御門出致し候処、刻改を取ニ些いさか不工面ノ由、跡ニテ聞、六ッ過帰リ暫して寝ル。

同 四日 曇 内へノ状相認居候内、先生・安次来り囲碁。七ッ過此ヨリ酒ニ成。五ッ過此迄吞。内へノ状・キセル・かんざし共封じ済、四ッ前ヨリ雨ニ成ル。御扶持米渡ル、四斗三升五合也。

同 五日 曇 少々づつ降り居、昼前ヨリ日和ニ成。田村ニテ囲碁。此夜同所ニテ酒ニ成、酔談。九ッ時頃帰リ寝ル。

同 六日 晴 田七・永友・田恵・同宿一所ニ猿若町一丁目芝居へ行。帰り懸上御屋敷ニテ刻改を受帰る。夜五ッ時也。（午後八時）直ニ寝ル。

同 七日 晴 此日喜三之進（山本）出足。権介も来り追々作七（谷）・徳弘周蔵も来り、山本小屋（山本安次）ニテ酒宴。終ニ見立済ヨリ内ノ己屋へ参り数々吞。又高村ノ己屋へ参り吞。帰り寝ル。

同 八日 晴 増上寺山門開へ馬蔵連、夫ヨリ神明前ニテ、先生・同宿・田恵・山安と一所ニ成り何角慰ミ帰ル。

同 九日 晴 麻布桑野へ稽古ニ参り、八ッ過帰ル。写本借用致し来ル。此夜先生ニテ馳走ニ逢帰リ寝ル。

同 十日 稽古出ニテ江戸前へ参り、日入頃帰リ、ヒシコニテ少々飲寝ル。

同 十一日 曇 稽古出ニテ又々江戸前へ参り、同宿・田恵と同伴ニテ少々買物致し、七ッ前帰り候所内ヨリノ状相達候由ニテ、馬蔵上御屋敷ヨリ取帰ル。三月十日ノ日付也。此日八ッ頃ヨリ少々雨ニ成ル。

同 十二日 少々雨 麻布調練へ出勤。備中雨強相成。七ッ時頃帰リ、恵三郎呼吞寝ル。

同 十三日 雨 上御屋敷一同御呼出、上衣着を以中御二階ニテ、御目付中被仰渡趣ハ、其方共去辰十月より今三月迄烈風ノ節、廻番相勤候ニ付当年ニ限り、式朱沓片宛格外被成遣之。一同難有御受仕。廻礼相済、桑瀬己屋へ立

寄馳走ニ逢、七ッ時過頃帰リ寝ル。

同 十四日 雨 御門出不致写本中、山安（山本安次）囲碁ヲ建立来り、追々田恵（田中恵三郎）も来り居候テ帰リ、晩方先生己屋山安と参り、且囲ミ且酌。夜ニ入帰ル。

同 十五日 雨 写本 昼前ヨリ先生己屋へ碁ニ被誘参り居。帰り候テ写本。此日大森へ行、跡ニテ田中ヨリ呼ニ来り参り大吞。無食ニテ寝ル。

同 十六日 雨 写本。中田村己屋ニテ碁初り、少ノ間参り居。此日下曾祢入門（下曾祢金三郎）ニ行、晩方帰リ雲直しニ七衛門来り吞寝ル。

同 十七日 晴 大風 終日写本。同宿ハ七平（山崎）と下曾祢へ神門（起請文を入れて入門）ニ行。

同 十八日 晴 昼前頃迄写本致し、夫ヨリ桑野工稽古ニ行。日入前帰り飯済候

処へ、同宿・田七等下曾祢ヨリ稽古戻り、田村へ行微酌。五ツ頃帰り寝ル。

同十九日 曇 五ツ時頃ヨリ桑野へ稽古二行。九ツ時頃より雨ニ成り馬蔵、傘持参。八ツ時頃帰り晚方田七ラト一所ニ呑寝ル。

同 廿日 晴 稽古出ニテ築地御屋敷へ参り、少々買物もいたし、日入頃帰ル。此日大砲仕掛、同宿其外皆も御台場へ行。

同廿一日 晴 御台場へ大砲仕掛ニ参り、帰りかけ南天屋へ灸治ニ参り昼過帰リ、状杯相認メ、夜ニ入そうめんの肴ニテ少々給寝ル。

同廿二日 曇 御飛脚立と申事ニテ状認メ、馬蔵ハ上御屋敷へ西村東左衛門上封の紙包物差し出し候処、田島団介ヨリ焼砂魚^{やまごり}到来、昼過ヨリ御角場ニテ御流儀(古田流・河野流)ノ内調練へ出勤七ツ頃済。山本(安次)小屋ニテ囲碁ヨリ酒ニ成ル。夜ニ入帰り寝ル。

同廿三日 雨 馬蔵麻布へ遣ス。昼過帰り桑野ヨリ書借り来り少々写し、又山本へ参り囲碁中、酒ニ成。其ヨリ高村へ行再酌。五ツ過帰り寝ル。

同廿四日 晴 写本。山本へ碁ニ参り居。昼ヨリ高村ニ、テニホハノ開キ聞ニ行。八ツ頃帰り写本。晚方先生・田七・田恵・山安迎へ呑寝ル。

同廿五日 晴 早朝ヨリ写本。同宿ハ三四人連レニテ江戸前へ買物二行キ、終日静ニ写本致し済ム。八ツ頃北岡儀之助来り直ニ返ル。晚方同宿帰り内同士少々呑寝ル。

同廿六日 雨 写本ハ済也。暮ニ藤(藤村清八)と呑筈ニテ御門出ハ出来不申。山安己屋ニ而終日囲碁、夜ニ入田七己屋へ被迎同酌、暫咄し居帰り寝ル。

同廿七日 雨 山本己屋ニテ終日囲碁。夜ニ入内ニテ少々飲寝ル。

同廿八日 曇 同宿ハ下曾祢へ稽古二行。此日麻布へ参り可申存候処、日和も不穩、場所ニテ囲碁ニテ済。終ニ田中ニテ呑帰り又再酌ニテ寝。此日七ツ頃松坂屋ヨリ内織袴参ル。

同廿九日 曇 昨廿八日 大守様御火消御用被為蒙仰、右ニ付俄ニ当日御飛脚

立ニ相成り、留守へノ書状六通相認。同宿・田恵上御屋敷へ参ル趣ニテ、頼遣ス也。夫ヨリ覚之助(安岡)同道ニテ麻布へ稽古志、御門出致し候処、雨ニ相成右ヨリ引返ス。内ニテ囲碁建立候場合、同宿も帰り夜ニ入内同士少々呑寝ル。

安政四己年五月朔日

五月朔日 雨 四ツ頃ヨリ風烈敷 小屋ニテ囲碁勝負ノ所、大津屋へ若江太夫・鶴沢勘寿ヲ参り候由ニテ案内申来り、高村先生と一所ニ参り久振ニ聴聞ニ行、日暮頃帰ル。

同 二日 晴 昼ヨリ稽古ノ志ノ処、内調練ノ日ニテ御角場(砲術操練場)へ小目附と原と被来、七ツ頃迄掛り済、夫ヨリ田中小屋ニテ先生一所ニ少々給居、内ノ小屋へ原計^{ばかり}迎え居、又少々給寝ル。

同 三日 晴 麻布桑野へ稽古二行。八ツ過帰ル。先生ヨリ被好、囲碁中酒ニ成。五ツ頃帰り寝ル。

同 四日 雨 写本到し居候内、高村へ参り囲碁。又酒ニ成ル。

同 五日 風雨 朝ヨリ数々参り、囲碁ヨリ酒ニ成。昼過より天気も快晴。七ツ頃他出を以入湯に行直ニ帰り、高村にて囲碁ヨリ酒ニ成り帰り寝ル。此ノ日内ヨリノ状達ス。三月廿五日・廿九日と二度ノ分也。

同 六日 晴 築地内調練ニテ出勤。帰り掛七軒屋石深ニテ呑、帰り寝ル。

同 七日 曇 写本。晚方高村家来藤吉、御賄銀受取来り呉ル。主従二月分ニテ、老歩と四百拾文也。夜ニ入田中より呼、ニお越ニ参り呑、帰り寝ル。

同 八日 半晴 写本。御触仲間中へ廻ス。昼過田七と他出を以外輪へ参り、料理屋ニテ少し呑。日入前帰ル。

同 九日 曇 昼頃ヨリ桑野へ稽古二行。夫ヨリ目黒ノへ参り高先(高村造酒丞)・田七(田村七衛門)・山崎七(七平)・同宿(藤村清八)・秦永(秦泉寺永衛)・猪半(猪野半平)と一所ニ成り、日暮頃帰ル。

同 十日 曇 昼前ヨリ桑野へ稽古ニ参り、七ツ時頃帰り夜ニ入り内同士少々

吞寝ル。

同十一日 晴 田七・山七・永田(友之助)一所ニ築地御屋敷へ参り、岡本(頼平)・日根野(弁治)へも参り、段々用事も相調、田中孝右衛門(嘉右衛門)病氣を見舞し処、種々馳走ニ逢う。帰りがけ采女うねめケ原ノ芝居、二幕見物。夫ヨリ日暮頃帰ル。

同十二日 晴 霧深シ、此日御定日ノ訓練、病氣ニテ出勤不為、其趣同宿へ頼遣也。内ニテ写本。夜ニ入田村己屋エ参り吞。

同十三日 曇 此日終日写本。晚方入湯ニ参り 帰り掛一寸立寄候処、市郎平も一所ニ成り吞帰り寝ル。此日御飛脚着。留守より四月十日同十五日、同廿日ノ状達ス。

同十四日 桑野へ稽古二行。七ツ過帰り、此日暮合頃建立居候処、田七(田村七衛門)・同宿(藤村清八)大森稽古ヨリ帰り、内ノ小屋ニテ一所ニ吞寝ル。

同十五日 晴 馬藏連松坂屋へ夏物注文ニ参り、夫ヨリ馬藏は築地御屋敷日根野氏(龍馬の剣術師範ノ弁治)へ桑野ノ聞書届ケ、樽ヲ借ニ遣し土橋へことと来り候所、芝居休ニテ、夫ヨリ切通しへ来り、女儀大夫へ入り候へバ浪志賀ニテ、九ツ少過より(正午過より)七ツ頃(午後四時頃)迄慰ミ、日入前帰り、空腹ノ処家来相手吞寝ル。

同十六日 晴 状杯少々認居。昼ヨリ高先・田七・永友・同宿・田恵・猪半一所ニ蘭船(オランダ国より献上の蒸気船観光丸)ヨリ御台場近へ舟ヲ乗見ニ行。船中酒肴設参り、随分興有リ。折柄風ニ相成七ツ前帰帆ス。万年屋ニテ少々吞帰ル。

同十七日 晴 朝ヨリ書状杯少々書居。八ツ頃ヨリ山七と他出致し、暮合ニ帰リ寝ル。

同十八日 雨 内へノ書状相認。紙包ニツ遣ス。七ツ時過隣己屋七ヨリ被呼、同宿一所ニ参り五ツ過迄吞、帰り寝ル。

同十九日 晴 交代伺出ノ儀ニ付、御用出を以上御屋敷へ参り、御役場へ出相

伺候処、交代ノ義御国元御詮義中と此度ノ御飛脚ニ申来り候ニ付、次ギノ便ニは委細願上ケ可申、左様心得候様被申聞也。夫ヨリ常之丞己屋へ参り馳走ニ逢。帰路切り通しニテ、女浄るり聞、日入頃帰り、同宿・田七と吞居、又少々吞寝ル。

同廿日 雨 テニホハ少々認。夫ヨリ御飛脚御延引ニ付、又々一通相認。今日迄ノ間ニ合兼、御徒目付へ頼ム。終ニテニハ之一件ニテ、高村ニテ吞。此日九ツ少過頃地震。

同廿一日 曇 写本。昼前ヨリ、テニハ開キト申事ニテ高村エ参り入湯。夫ヨリ昼過開坐也。初テ出□致候所一卷取、夫より外輪へ入湯ニ参り、二八杯給帰り、内哈ノ己屋へ段々招同宿ヨリ カケノ馳走スル。

同廿二日 晴 写本。安次所持ノ・オクタント(測量器)試ニ参り直ニ帰り、於御角場訓練下替御定日へ出勤。七ツ頃仕廻帰り候テ又写本。夫ヨリ夜ニ入り同宿と鯉節ニテ吞寝ル。

同廿三日 晴 四ツ頃ヨリ桑野ニ稽古二行。八ツ過為保養、逢□へ立寄少々吞。初メ微酔ニテ帰ル。同宿ハ此日築地、上御屋敷へ行。先へ帰り居。田七ハ嘉久介誘ニテ、飛鳥梅見塚ノ辺ヨリ所々見物二行。

同廿四日 晴 築地御屋敷ヨリ上御屋敷へ参り、扱大小縁頭出来、カネ代手間共別紙書付有リ。長谷川(勘助当時格式白札)エ頼置帰ル。折節同宿、田恵小鯉打、大分漁事有之。味宜仕成ヲ馳走ニ逢う。

同廿五日 日ノ出過ヨリ田恵・同宿と自分三人馬藏を連稽古出ニテ、飛鳥・道灌・日暮しノ辺へ参ル。別ニ書付有リ。実ニ宜キ処也。色々慰ミ、日入前帰ル。

同廿六日 晴 髪月代等致し、前日ノ疲レ休メ、昼過ヨリ高輪本多様御屋敷、沖对翠へ。山七一所ニ参り候処、折柄留守ニテ得不逢 兩人鯉節土産ニ贈り紙三枚頼ミ置、尤色々書画見、帰り千歳ニテ興有リ日入過帰ル。

同廿七日 晴 朝ヨリ築地御屋敷へ稽古出を以参り、岡本氏(頼平)・戸部氏(廉平)此日ニ居合、尤戸部氏七衛門借来ノ本ヲ被頼返ス。帰りがけ宮政

ノ席へ立寄聴聞して帰ル。七時半時也。

同廿八日 晴 昼迄写本致し、七平(山崎)・赤沼ノ誘ニテ薩州御別荘拜見建
立一所ニ参り、御築山・御池ノ辺ヨリくわしく拜見致候所、鴨取場・雁取
場、夫々おこしらへ実ニ自由成場所ニテ御座候。夫ヨリ大津へ伴ヒ一興。
夜ニ入帰ル。此夜ヨリ蚊屋釣ル。

同廿九日 晴 四ツ時頃ヨリ桑野へ稽古ニ参り、八ツ過頃師匠へ立寄、少シ盃
帰ル。尤少々夜ニ入ル。

同 卅日 晴 朝雨降涼し、四ツ頃(午前十時頃)ヨリ高先・同宿沖建立、保
養ノため参り候所、先生ノ新綱ハ、イナ(ぼらの幼魚)ノ目ニ合不申少々
取レ、然ニ初テ打候時、ニロギノ大・尺計ヲ打込一度ニテ三十入来候。
夫ヨリ大森えことことエビカタケ少々取、沖合ニテ大鰯二本取、夫ヨリ八
ツ時帰ル。内ヨリ四月廿七日、五月朔日、同十日ノ状到着ス。晚方高村ノ
風呂為湧入湯、後ヨリ先生綱祝(投網おろし)ニテすしや酢漬ニ仕成、
快酔也。五ツ前帰リネル。

安政四己年閏五月朔日

閏五月朔日 曇 状認メ昼頃ヨリ他出ニテ外輪へ保養ニ行。暮合前帰ル。内へ
田七・田恵待受又吞居、又少々吞寝ル。

同 二日 晴 昼迄状認。夫ヨリ御角場ニテ調練下替。七ツ前済入湯ニ行。帰
リ田村己屋へ被招吞。

同 三日 曇 昼ヨリ同宿同道ニテ桑野へ稽古ニ行。同宿ハ青山へ参り候所、
両所師家問居早ク帰り、二本榎ノ女儀太夫ノ席ニテ相慰ミ、夫ヨリ松田屋
ト云所ニテ節酔ニテ帰り、又田村小屋へ被呼 夜ニ入迄吞返り寝ル。

同 四日 雨 昼頃ヨリ正徳寺ヲ尋候処、留守ニテ、帰り掛、彼ノ稽古ニ立
寄。七ツ時頃帰り田中へ被招吞居。又先生ヨリ呼ニ来り生花出来候由、夫
ヨリ酒ニ成暫して帰り寝ル。

同 五日 雨 桑野へ参り候処、留守ニテ空敷帰り居。兼テ田七・田恵杯約束

ニテ、二本榎ノ女儀太夫へ立寄候所、田七待兼一所ニ成り候処、此日役者
来り不申、少々酒杯給。暮合前帰り、食後山本へ少ノ間参り帰寝ル。

同 六日 晴 状ノ書掛認居。一同申合荷稻様参詣。戻リニ南天屋へ立寄灸治
スル。八ツ頃帰り候所、同宿・田恵・永友・山安・先生と沖へ、七ツ頃時
ニ帰ル。少々獲物有之也。暮合高村ヨリ呼ニ来り五ツ頃迄吞。帰り寝ル。

同 七日 晴 兼テ流星火花建立居候テ、同宿・先生と三人ニテ、五ツ出来。
稽古出を以大森沖へ漕出し試候処、一向事ニ成り不申。其内よふヨフ一つ
無事ニ済ム也。船中酒肴少々積居、又船ニテ鰯・鱸買鮮魚賞玩いたし、
三浦屋ノ前エコギ付、掛茶屋ニテ少々給、暮合帰ル。

同 八日 晴 西風ニテ蒸気強し、桑野へ稽古ニ参り候処、折柄留守ニテ、帰
掛二本榎女席へ立寄候所、是も役者不来、八ツ時過帰ル。夫ヨリ文三郎(山
崎)断ニ来り対酌也。

同 九日 晴 西南風 蒸気前日ノ如し。桑野へ参り稽古済、八ツ頃帰り、田
七へ被呼、吞寝リ寝ル。

同 十日 晴 風、蒸気同断。写本、晚方入湯ニ参り帰候而、田七ヲ招、夜ニ
入迄吞寝ル。

同 十一日 晴 安岡覚之助俄ニ帰国ノ由ニテ、当御屋敷へ立寄。山田も少数デ
も見送り来り、山本己屋(安次)ニテ賤別のため酒肴為齋、留守へ状ヲ
添守り誓頼遣ス。八ツ頃出足大森迄見立参り、帰り掛入湯ニ参り山本己屋
ニテ微酔眠。

同 十二日 晴 朝霧深し、麻布御流義調練ニ出勤。八ツ前相済、帰り掛大津へ
立寄。先生・永田・同宿・猪光・自分五人ニテ大分酔、日入余程前帰り、
高村の風呂ニ入、七平小屋ニ立寄、又々対酌、五ツ過帰リ寝ル。

同 十三日 晴 外輪稽古を以、七平(山崎)と買物ニ行。日暮頃帰り、田七(田
村七衛門)へ被招、九ツ前(十二時前)迄嘉久助も来り居、酔談。
同 十四日 晴 稽古出を以築地御屋敷へ参り、夫ヨリ金花堂へ参り買物致し、
帰り掛、伴ノ所へ立寄微酔。日暮頃帰り候処、又田七ノ己屋ニ同宿・恵三

郎と吞被呼、又少々吞帰り寝ル。

同十五日 晴 写本。同宿ハ両国辺より梅若塚迄弥作連参り、上御屋敷へ立寄。夜五ツ過帰ル。此日ハ晩方迄門出不為、八ツ頃小鯰こま貫ニ参りすし仕成、入湯ヨリ帰り田七ヲ招快酔ニテ寝ル。

同十六日 曇 写本余程精出し、晩方数々一所ニ入湯ニ参り、直ニ帰り候処、此日嘉久助角前ノかけ有之候由ニテ、終ニ田七ニテ負ケの人数ヨリ出銭有之、馳走ニ逢。夜四ツ頃帰り寝ル。

同十七日 雨 早朝ヨリ写下ニテ門出も不出来。少々写本ノ浹せめ洽致し居候所、晩方外輪行建立、入湯ヨリ、三清楼へ参り、大分ノレ夜ニ入帰ル。此夜ヨリ朝へ掛大降り。

同十八日 雨 写本。此日ケベル(ゲール銃)ト火繩(十匁火繩銃)とのタメシ有之。夫ヨリ田村迄参り、夜四ツ時頃迄吞、帰り寝ル。

同十九日 雨 同写本。状杯相認。日暮頃又田村ヨリ呼候ニ付参り吞。夜ニ入帰り寝ル。

同 廿日 雨 稽古出を以、山七(山崎七平)と兼約ノ通り二本榎ノ辺へ出掛候所、公辺ノ御穩便ニテ空敷、其処出、本田御屋式へ立寄、对翠たいすい(沖氏)へ頼有之候画受取、夫ヨリ道ニテ吞ミ、夜ニ入帰ル。此日御飛脚立也。

同廿一日 雨 写本。晩方嘉久介・田七杯一所ニ入湯ニ参り、帰りニ、ギチ杯ノ新鮮ヲ買、同宿病氣ニ付田村小屋へ持参。此夜四ツ時分迄嘉久介一所ニ吞、帰り寝ル。

同廿二日 晴 昼迄写本。御流義調練ニテ出勤。八ツ過相済、七ツ時ヨリ田七(田村七衛門)・田永(永田友之助)・山七(山崎七平)・猪光(猪野光馬)と入湯ニ参り、夫ヨリ為納涼、三清楼へ登り日暮頃酔帰。同宿病氣ノ見廻ニ隣宿来り、酒中又少々給寝ル。

同廿三日 曇 稽古ニ桑野へ参り候処、折柄留守ニテ昼頃帰り、支度致し候テ、嘉久介同道を以目黒・千代ヶ崎辺見物ニ。田七・永友と四人連ニテ参り随分保養。渋谷広尾町東原亭と云料理屋ニテ一興。夫ヨリ帰路夜ニ入、

赤沼節山へ寄り又小酌。四ツ時(夜十時)帰り寝ル。此朝七ツ半(午前五時)地震。

同廿四日 曇 用事有之稽古ニも参事出来不申。八ツ時浜川御台場へ大砲稽古ニ行。済候テ入湯致し帰り、田中小屋へ被呼吞、帰り寝ル。

同廿五日 快晴 賄銀主從ニケ月分ニテ、壹歩と四百拾文。山崎七平家来へ頼ミ有之、持参を以慥ニ受取。晩方角場(砲術操練場)へ嘉久介・七衛門・光馬・恒之進(安岡)一所ニ参り、暮合高村ノ風呂ニ入り、此夜嘉久介へ被招、田七・猪光一緒ニ参り、吞帰り寝ル。

同廿六日 晴 桑野へ稽古ニ参り、又蜷川(藤五郎)へ立寄り、「拔隊龍」ノ書一卷借来ル。八ツ過頃帰り内同士少々吞寝ル。

同廿七日 晴 稽古ニ参り帰り掛、大津ニテ一興。暮合頃帰ル。四ツ時分ヨリ大風雨ニ成ル。此日内ヨリ五月廿五日、壬月朔日ノ状達ス。

同廿八日 大風雨 終日写本。蕎麦切為取寄、田七・同宿三人、暮合頃ヨリ吞ミ寝ル。

同廿九日 雨 写本。昼頃七衛門建立ニテ高村ニテ生花致し、数瓶出来ル。晩方田七ノ小屋へ同宿一所ニ被呼、五ツ時迄吞帰り寝ル。寒メキ重着。

安政四己年六月朔日

六月 朔日 晴 写本致し居。昼頃ヨリ覚助・七衛門・七平・光馬、蜷川入門同道致し、折柄留守ニテ、夫ヨリ両国えことと参り候所、川筋出水ニテ花火等も無御座料理屋ニテ吞候内、日暮ニ相成。悪風悪寒、無程帰杖ヲ催し、夜九ツ時草疲くたひれ帰ル。

同 二日 状杯認居。御流義内調練ニテ、御屋敷御角場ニテ、乾坤三殿、岡本頼平殿・西野佐兵衛殿見へ、八ツ前ヨリ七ツ前迄練り、夫ヨリ御台場へ大砲手継(操練稽古)ニ参り、帰懸入湯帰り候テ、田七・田恵ヲ迎へ五ツ頃迄吞ム。此日御傘屋惣次来り 暑中見廻みまわとして見事ノ焼鯰やきざんま到来也。

同 三日 晴 写本。昼頃ヨリ暑氣ニ成ル。此日玉入調練有之。岡本先生(頼

平)見分被見。高村小屋へ立寄、先生も心待居候テ、昨日到来ノ燒鰻・其
余酒肴少々齋もたらし、久振ニテ一所二吞。

同日 晴 写本。昼過ヨリ御台場へ稽古ニ参り、宮川十内子来り七ツ過相
濟。夫ヨリ入湯。明月庵へ立寄り、空腹ヲ補ヒ帰ル。

同日 晴 御飛脚立ニ付、書状残りを取急ギ認仕廻、田村ノ家来へ頼ミ遣
ス。八ツ前ヨリ田七・田恵・永友同道ニテ、久左衛門ヲ連沖へ出掛、色々
して六七十鱒ばらを取。万年屋へ参り手料理ニテ吞。日入頃帰ル。夫ヨリ山七
へ参り居、湯を遣ヒ、食事して寝ル。

同日 晴 髪月代等致し、築地内調練へ田七・猪光同道ニテ行。七ツ少過
濟。田中孝右衛門(田中嘉右衛門)小屋へ被呼、一同参り馳走ニ逢。暮合
前ヨリ彼御屋敷ヲ出、四ツ前帰ル。

同日 晴 四ツ時分ヨリ田七同道ニテ、蜷川へ参り、手継稽古。八ツ少過
ヨリ・山七・山文・田七四人連ニテツクシが原ヨリ白銀へ出、高輪えこと
こと参り、此日天王祭祀ニテ、品川宿賑々敷、日入前迄見物。且一醉して
帰ル。

同日 晴 昼頃ヨリ田七・永友・田恵同宿ニテ稽古出を以、大森二角力有
之様子ニテ出掛候処、日ノ間違ニテ所謂治り付不申、かつきやと言へ立寄
□…□杯居候所へ、久左衛門・助四郎鱒まほヲ打て参り呼候処、酔し等二仕
成殊ノ外味宜。日入前頃迄吞、皆々一所二帰ル支度杯致し、五ツ頃寝ル。
八ツ時頃雷鳴也。

同日 曇 田七へ(田村七衛門)山文(山崎文三郎)来り。抜隊龍バクタイロウ・或ケ
ヘル(抜隊龍操練使用のゲール銃)手継ノ詮義。晩方入湯二行。帰り田
七小屋へ被招吞居。御手廻惣次夜ニ入出足ニテ書状頼ム。此日内ヨリ壬
(閏)五月十日と同十六日ノ状達ス。

同日 嘉久介同道ニテ、大森へ角力見物ニ参り、此日浜川明神宮、ムネ
上ゲニテ、餅杯沢山ニ投、賑々敷事也。夜ニ入六ツ時頃帰り又田村ニテ吞
寝ル。

同十一日 晴 此日も嘉久介同道ニテ、上御屋敷ヨリ両国辺迄遊二行。天馬町
近辺祭礼賑々敷事。筆ニ尽しがたく、夜ニ入九ツ時帰ル。此日内ヨリ金子
壱封御飛脚方へ参り居、受取五両壱歩也。

同十二日 晴 紙面物持寄詮義。昼過ヨリ嘉久介・田七・山文同道ニテ、蜷川
へ稽古ニ参り候処、先生留守ニテ、池田氏ニ頼手継少々、サンギ少々稽古
致し、夜ニ入帰路、二本榎万松楼ニテ一酔、月宜し。九ツ時過帰り寝ル。
此日先生へ暑見廻として式朱づつ遣う也。

同十三日 晴 一兩日ノ疲レニテ四ツ前迄(午前十時前)寝居。起田村己屋へ
参り居候処、山本安次ヨリ呼候ニ付参り候処、家来乙松久々病氣ノ所、只
今差詰(死亡)候と申場合、氣ノ毒千万ニテ御座候。夫ヨリ頼を以徒目付
へ引合候事有之。濟候テ帰り、昼時分ヨリ写本、且少々状認ル。夜ニ入候
テ田七・田恵迎飲。

同十四日 晴 早朝ヨリ鈴木先生(彦之進)へ暑見廻工行。上半紙一束贈ル
也。夫ヨリ築地御屋敷へ立寄り、帰りがけ切通しえこと来り、馬蔵召
連居候テ、浪士賀が席へ立寄り聴句きまぐち中、八ツ半頃雷鳴ニ成り、直様其処
立出急ギ帰ル内、高輪辺ヨリ雨雷共ニ静ニ相成。大津屋へ迄来り休足中、
半平(猪野)も来り一所ニ相成。暮合頃迄吞帰り候処、市郎平内ノ夏神祭
ニテ案内ニ来り直様参り再酔。四ツ頃帰り寝ル。

同十五日 曇 御飛脚立と申事ニテ状認。昼頃ヨリ嘉久介同道を以、田七・同
宿・田恵・永友と一所ニ氷川明神ノ祭礼見物ニ行。帰りがけ色々曲有之
也。夜四ツ頃帰り寝ル。

同十六日 晴 写本。晩方田七・永友・田恵同道ニテ入湯二行。大津ノ湯ニ入
り直様酒ニ成。日暮頃帰り同宿と内ニテ少々給居。又少し合ヲして寝ル。
同十七日 曇 写本。晩方田村己屋ニテ珍酒給。夫ヨリ高村ニ参り少々囲碁。
夫ヨリ再酌。直ニ帰り寝ル。

同十八日 晴 稽古出を以七平と植野(上野)ノ方を志シ、暑氣堪兼候へども
御成り、小路へ参り、名立屋米蔵方へ持鑓もちやり注文致し、つつ毛ノ替鞆かえだま付キニ

て、太刀打ノ処青貝、銀ノ金具にて一切一兩ノ筈。出来次第上御屋敷長谷川己屋（白札勘助）へ持参ノ事申置。東叡山えことと参候所、不忍池蓮ノ花開居。七平ハほんなみ（刀研）へ行。夫ヨリ池ノ際菊屋ニテ再会約し、八ツ時分ヨリ七ツ頃迄吟酌。頗興あり。帰りがけ上御屋敷工立寄、刻改ヲ取四ツ時（午後十時）帰ル。

同十九日 晴 品川天王祭祀ニテ賑々敷由を以、五ツ頃ヨリ他出を以、田永（永田友之助）同道ニテ出懸候所、高先・同宿松魚為買帰り候場合、道ニテ相奪、角屋工持参、御国流ニ料理等相好、四ツ少前ヨリ酒ニ相成り、七ツ前（午後四時前）迄吞。夫ヨリ品川えことと参掛候処、格別ノ賑も無御座、西瓜ヲ一つはづみ大津へ齋^{もたらし}再酌。一同大酔ニ至り暮合頃帰ル。此日晚方雷鳴小雨

同 廿日 曇 写本。昼ヨリ先生・田恵ハ同宿（藤村清八）一所ニ測量出を以沖へ参り、大分漁事有之、万年屋ニテ趣向付、日入頃帰ル。

同廿一日 晴 前日ノ漁ニ一同大競^{おあそび}ニテ、高村ノ九節ヲ、スキツギニ取懸り、晩方迄田中小屋ニテスキ、同宿・源六（池）一所ニ吞ミ、五ツ頃帰リテ寝ル。

同廿二日 雨 少々降り居、五ツ頃止ム。髪月代杯済、田中小屋迄参り投網ノ趣向。晩方池小屋一同参り吞。

同廿三日 晴 馬藏連、上御屋敷へ参り、岡本（頼平）・松岡（七助）両子同道を以、横山湖山へ参り、夫ヨリ湖山同道ニテ两国えことと遊行。船へ酒肴^{もたらし}ヲ齋^{なまし}納涼ノ趣向。是時ノ景色言計^{いふばかり}なし。日入前外々へ挨拶致し、上御屋敷迄来り、刻改を受、夜四時帰ル。此日横山へ入門料壹歩遣ス。

同廿四日 晴 兼テ網^{あみ}脚^{あし}ノ約束日ニテ、先生初船ニテ参り候所、折柄風ニ成り、海上浪立候テ、少々計り漁致し、大森八幡前ニテ吞。七ツ過帰り、田中小屋ニテ再酌。

同廿五日 曇 昼前ヨリ桑野へ参り、暑見廻持参。帰り掛品川正徳寺ノ隠居、南園を訪候処、幸在宿。暫咄居候テ相別、大津へ立寄り小酔夜ニ入帰ル。

同廿六日 他出。此日七平ヲ南園へ同道令筈ニテ、朝ヨリ拵居詩杯少々相認、持参ノ所、各段おもわくも不言、山七も我歌を為見、是亦同断。色々書画ノ帳・軸物杯見、八ツ頃又大津へ参り候へバ猪半（猪野半平）参り合セ居。一所ニ酔。夫ヨリ薩州御屋敷内ニ御祭有之。神楽杯も有之様子。見物ニ参り、日入前帰ル。

同廿七日 曇 鈴木（彦之進）へ参り掛、ヒジリ坂ニテ投網ヲ求ム。壹歩弐朱也。馬藏召連居候ニ付、此所ヨリ返し、夫ヨリ先生家へ参り、八ツ頃稽古済。上御屋敷長谷川・岡本小屋へ立寄、岡本ニテハ酒ニ成り、久敷咄し候内日入ニ成り候テ、刻改を取、新橋ノ北ヨリ駕ニ乗り、高輪迄来り、此日無食故、大空腹ニ付大津へ立寄り、少々又リ（利）ヲカケ支度致し、五ツ半ヲ打場合ニ（午後九時）帰り直ニ寝ル。

同廿八日 曇 写本等致し居候所、大熊平次帰国ノ由を以暇乞ニ来り、明廿九日出足様子。然ニ田町ノ辺ニテ雷雨ニ逢候由。追々当辺へも降来り、久振ノ能キ潤也。晩方田七・永友一所ニ入湯ニ参り、明月庵ノ蕎麦ヲ給。帰り夜ニ入候テ、北代ヨリ被招四ツ頃迄吞。

同廿九日 晴 蜷川・桑野へ稽古ニ参り、帰掛少々雨。此日馬藏網打ニ参り、少々漁致し参り、清介・才藏・弥介杯呼為吞、此夜御飛脚着。

同卅日 晴 投網スキ続、池ノ大先（池源六）世話ニテ、堅介杯まとい出来ル。自分ハ朝ヨリ写本。晩方参り手伝酒肴ヲ贈ル。覚介も参り合候由ニテ呼ニ来り再参。四ツ前頃迄吞居帰り寝ル。

安政四己年七月朔日

七月 朔日 兼テ函約有之。嘉久介同道ニテ・田七・永友・田恵・同宿（藤村）・池源（池源六）一所ニ玉川ノ鮎給ニ参り、山七・猪半も早々参り居一所ニ相成。大分漁師獲物有之。追々赤沼（医師節山）も参り川原ニテノ趣興有り。帰路夜ニ入六ツ過（午後六時過）帰ル。内ヨリノ状、段々上御屋敷ヨリ廻り来り灯下ニテ読寝ル。

同 二日 雨 晩方少々アカラミ、先生・同宿・猪半・永友・田恵一所ニ外輪

へ参り大分酔ヒ也。

同日 曇 稽古出を以、シノブ山通行ヲ見物ニ参り候処、早く通り候訳ニテ、夫ヨリ猪之介入湯ヨリ、ソロソロ帰り写本。此日金子入老封上御屋敷・御飛脚方へ馬藏取ニ遣ス。酒なしニ寝ル。

同日 写本。当御屋敷空発調練ニテ、岡本頼平殿来り、野島小屋(清五郎)ニテ休足。酒肴送り晩方一所二吞。夜ニ入被帰又跡ニテ少々吞居、帰り寝ル。此日關邪小言持参シ呉レル。

同日 晴 御飛脚立ニテ書状認ルニ世話敷、昼過頃仕廻。關邪小言目二、百八十包運賃先、四百也、御飛脚便ニ返ス。八ツ前頃ヨリ七衛門同道ニテ馬藏を連、大森御台場ノ近カへ鰯打ニ参り、田永(永田友之助)モ一所二成り、八幡前ニテ吞帰ル。

同日 晴 於大森御町場(御台場丁打場)松平兵部小輔様御仕込ニテ右御出張。大工原土佐之助ト云者、地雷ノ業有之。野礼成を見事ニ出来候也。

右見物ニ付蜷川先生同道ニテ帰掛両国ニテ吞。余程ニテ帰ル。此日ハ嘉久介同道也。

同日 晴 門出せず晩方入湯ヨリ大森ニ花火有ノ様子ニ付、七ツ時分嘉久介同道を以、田七・田恵・永友・同宿一所ニ富士ノ湯ニ入り、夫ヨリ明月庵ニテ微酔。御台場へ立寄大森えことと参り候処不初、八幡前料理屋へ一寸参り酔を重ね、夫ヨリ火花見物致し、四ツ頃帰り寝ル。此夜ニ明ヨリ雨ニ成ル。

同日 雨 終日降 風も添門出せず。山本小屋へ咄ニ参り、晩方帰り詩杯考居候所、七衛門上御屋敷ヨリ返り、一献と頻ニ申ニ付、参り給、五ツ過頃節酔ニテ寝ル。

同日 晴 一兩日前ヨリ少々不心地ニテ門出せず。只機付状出。尤住吉屋源次呼寄着刀ノ手入スル也。酒なしニ寝ル。

同日 晴 風立余程涼し過。金子着スル也。昼頃ヨリ他出致し赤沼へ参り詩杯為見、且服部見覚ニテ粉薬五丁呉ル。夫ヨリ富士ノ湯ニ入、南天屋の

灸を志し、立寄り候所、世話敷様子ニ付ソロソロ返り、又詩杯考へテ此夜も酒なしニテ寝ル也。

同日 晴 詩杯案じ居。昼頃ヨリ南天屋へ灸をしニ行。八ツ少過頃帰候テ、写本杯致し、晩方酒なしニテ寝ル。

同日 雨 此日御足軽市郎平参り、昼過ヨリ外輪へ参り、入湯ヨリ青物町近カノ料理屋へ入り、市郎平はづみ(おごり)ニテ逢馳走。日暮頃帰り猪之助(田村)書経ノ跡読ニ来り相手致し、四ツ頃寝ル。

同日 晴 写本致し済、先生・同宿・永友沖江鰯ニ参り、精進堅メト申事ニテ帰り待兼居候処、八節鰯五十計り漁有之。直二五ニ料理致し、高村ニテ甚好キ塩梅ニテ吞ミ、月ハサヘル、心地甚宜。馬藏も此日吞ニ参り少々漁致し来ル。文山崎(山崎文三郎)小屋へ参り咄居候内地震。夫ヨリ帰り居猪之助跡読ニ参り、少し相手して直ニ寝ル。

同日 雨 少々写本杯致し、高村ニテ投網スキ継杯致し居。晩方大先(池源六)・田恵・同宿と入湯ニ参り、夫ヨリ精進ニテ吞答ニ相成、大津へ参り候処跡ヨリ七衛門来り、追々快酔ニ致し、日暮頃帰ル。

同日 曇 長谷川勘助出足と申ニ付、暇乞世話ニ成候礼旁、稽古出を以上御屋敷へ参り、大小(刀)も出来来り居、取帰ル。半途ニテ、浪志賀ノ席へ立寄、ソロソロ日入時分ニ帰ル。馬藏相手少々給寝ル。

同日 曇 朝ヨリ嘉久介同道を以、田七(田村七衛門)・永友(永田友之助)・池源(池源六)・田恵(田中恵三郎)・山七(山崎七平)・山文(山崎文三郎)・野清(野島清五郎)・藤清(藤村清八)・安恒(安岡恒之進)・自分(岩井孫六)、高輪ヨリ乗船。両国迄参り、夫ヨリ浅草ノ辺ヨリ、吉原燈蜃見物ニ参り、随分面白ク夜ニ入四ツ過帰ル。

同日 桑野へ稽古ニ参り、帰り掛大津へ立寄り、酒ノ場合、田七・猪半・永友・田恵も蜷川(藤五郎)ヨリ帰り掛一所ニ成。日暮迄吞居。帰り候所内ヨリノ状達ス。

同日 写本。昼過ヨリ馬藏服部ニ打ニ参り、暮合頃酒こん立居候処、同宿

(藤村) 坂本ヨリ光馬と伝授済来り、右心祝込、幸之加合・田七・田恵・永友・山文も来り、余程呑寝ル。

同十九日 晴 写本。中田恵来り、高村投アミスキ仕廻度ト申ニ付参り居。晚方北代(寛助)ノ湯ニ入り候後、池之大先(池源六)ヨリ被招、参り吞ム。

同 廿日 晴 早朝ヨリ馬藏連買物ニ参り、帰り掛浪志賀席へ立寄り、夫ヨリ帰り明月庵ニてそばの肴ニて、主従三合引掛ケ、日入頃帰ル。

同廿一日 晴 終日写本。松岡ヨリ(松岡七助) 湖山先生(横山)之書届ケ来ル。昼過ヨリ鯉打ニ参り 五六本取来り右下物ニして吞居候所へ、同宿買物戻り、七衛門も呼候テ、五ツ頃迄呑寝ル。

同廿二日 雨 暁七ツ頃(午前四時頃)地震。五ツ前ヨリ雨ニ成ル。此日も終日写本。八ツ頃恵三郎こん立んかと言事ニテ、取ニ遣し手料理ニテ、夜四ツ前迄呑寝ル。

同廿三日 風雨 七ツ前迄写本致し、同宿と入湯ニ行、明月庵へ立寄、少々ニ八ヲ給帰り、高村小屋へ参り居。酒ニ成、夜五ツ過帰り寝ル。

同廿四日 朝八時居、四ツ前ヨリ雨ニ成り、九ツ時分余程ノ雷鳴。此日も朝ヨリ写本。八ツ時分大廻荷物扱拵ル(一年間の臨時御用も交代時期となり大廻船に積み荷の準備)。御賄銀渡ル七、八二ヶ月分表歩と四百五十八文也。夜ニ入少ノ肴ニテ田七ヲ招キ小酔ニテ寝ル。

同廿五日 雨 写本。晚方田七ト入湯ニ行。明月庵ノソバニテ 酒なしニ寝ル。

同廿六日 晴 写本。此日大廻りへ荷物遣ス。七ツ時分ヨリ嘉久介同道を以、高輪月見ノ賑ヒ見物ニ出掛、同行拾耆人也。宿ノ辺ヨリ賑ヒ一通ならず。

無程高輪へ参り候へバ、常盤津ノおどり其処此処夥敷見物致し居。酔を呼ニ一同這入り呑候内、五ツ時分ヨリ雨ニ成り、暫見合居候処、少止候ニ付ソロソロ帰り、釜屋ノ通辺へ参り候節、又雨コボレ且雷鳴ニ相成、大降ニ相成。暫止マシ居、漸ク四ツ時分帰ル也。

同廿七日 曇 数々蜷川へ稽古ニ参り、自分桑野へ先以行。夫ヨリ蜷川へ廻

り、帰り別々ニ相成、大津へ立寄り候テ、少し慰候テ、暮合帰ル。此日昼頃ヨリ快晴。

同廿八日 晴 早朝ヨリ写本。尤冷氣ニテ昼時迄ハ重着スル程也。晚方後大先(池源六)へ被招、夜ニ入迄吞ミ居。帰り候テ、小歌きげんニて寝ル。

同廿九日 晴 四ツ頃ヨリ雨ニ成、早朝ヨリ写本。晚方前測量稽古出を以、田七・永友と三人連ニテ外輪へ参り、大津ニて呑寝ル。此夜大風雨也。

安政四己年八月朔日

八月 朔日 晴 早朝ヨリ写本。七ツ前ヨリ市郎平同道を以入湯ニ行。夫ヨリ大津へ参り候処、半平(猪野)参り居一所ニ、夫ヨリ余程刻を移し、夜ニ入帰ル。

同 二日 晴 終日写本。夜ニ入、田村己屋へ参り節酔ニテ帰り寝ル。

同 三日 晴 桑野へ稽古ニ参り候処留守ニテ、帰掛二本榎ノ辺ニテ小供ノ手躍り扱少々見物致し、日入前帰り、同宿と梨子(加子方)ノ下物ニテ呑候処へ、馬藏漁致し来り、酔付ニ仕成、快呑。寝ル。

同 四日 曇 御飛脚立と申事ニテ状認ル。昼ヨリ稽古出を以南園へ参り、兼テ頼置候書、見合候処、井伊様(井伊直弼)御内、春田源藏九臈、明石様御内・津田梅南、高輪東漸寺栖雲ノ作も世話致し呉ル。帰り掛大津ニテ七山(山崎七平)と一所ニ成り、晚方日入頃帰ル。御飛脚延引。

同 五日 曇 些風邪心地ニテ、終日どこえも出不申、詩集扱見。馬藏ハ麻布ヨリ水天宮様へ遣ス。夜ニ入り鯉節ノ肴ニて少し呑寝ル。此日御扶持米渡ル。八、九二ヶ月分九斗也。

同 六日 晴 馬藏ヲ桑野ニ遣し、書借来り写本。馬藏ハ鯉打ニ行、日暮頃帰候所、七節八節位ノ魚十二獲物して帰り、其少前同宿も少々取帰り居、一つニして鯉ニ仕成、田七・田恵呼、呑、寝ル。此日内ヨリ七月二日ノ状達ス。

同 七日 曇 御飛脚立と申事ニテ状認居候処、又延引ニ相成候テ、止メ写

本。晩方弥作（山本安次家来）对手ニ豆腐ノ奴、摺大根カタケニて吞ミ寝ル。

同 八日 曇 写本。美濃屋来り段々買物。昼頃ヨリ又写本。晩方高村へ参り盤上帰候テ、小キハラカタノ酢作と、鯉ノ塩焼ニて内同士快酔。一同浄ルリニて寝ル。

同 九日 快晴 四ツ頃ヨリ稽古出を以、永友・田七・田猪（田村猪之助）一所ニテ塩見坂女芝居ニ参り、カルカヤ同心大出来ニテ面白ク、日暮頃帰リ候所、馬藏手柄ノ鯉、すしニ仕成、居好キ腹塩梅ノ場合ニ、内同士快酔ニて寝ル。

同 十日 晴 写本。七ツ頃ヨリ田七同道ニテ御台場へ参り、夫ヨリ入湯。高村・藤清・逸吾三人ノ漁ヲ見、帰りがけ先生へ参り右肴ニて吞、帰り寝ル。御飛脚立ニテ状北代（堅介陸目付）へ、田村と一所ニ頼ム。

同 十一日 晴 写本。晩方入湯ニ参り、料理屋ニテ吞。興有り。

同 十二日 稽古出を以、馬藏召連、上御屋敷金花堂ノ辺、築地御屋敷へも立寄り、暮合頃帰ル。七山崎ニて少々吞。

同 十三日 曇 写本。七ツ前頃ヨリ雨ニ成ル。日暮前吞マント欲スル時、馬藏二十余り七節鯉取来り、少々肴ニして跡ハ塩ニスル也。同宿ト快酔ニて寝ル。

同 十四日 晴 朝写本。昼前ヨリ稽古出を以、正徳隠居へ参り咄ノ内、酒出し来り、微酔ニて帰り、山七と一所ニ成り又吞。日入頃帰ル。

武夫豈思大刀頭

馬首東行十五州之

処何辺遇良夜 川

鴨水外湖秋

右行宗桃源君へ御錢別

之 御作之由

相生に老そふ千代のたねも

見んあをく宮居も高砂松

書権大納言藤原基賢卿

歌

幾世ともおなし緑の色そへて

さかふるかけハ高砂の松

書一條内大臣忠良公御歌

メ松の下ニ七尺斗五寸角位

之石柱ニ朱字鯛有之

むかしより世にハその名も高砂の

松のみとりの栄へひさしき

書中山大納言忠尹卿歌

富士川ヨリ半道斗リ参り

候所 右之碑建居芭蕉

之句有り

ひと尾根ハしくる、

雲か富士の雪

安政四己年八月十五日

八月十五日 曇 昼前ヨリ桑野へ参り候処、留守ニて直ニ帰路。台町辺ニて御

祭り少し見物。夫ヨリ品川通来り鮎屋ニ立寄り、快酔ニテ暮合頃帰ル。此

日昼頃ヨリ雨ニ成ル。

同十六日 雨 写本読合等致し居。昼頃ヨリ晴間見。八ツ頃ヨリ猪半(猪野半平)・安恒(安岡恒之進)と一所二稽古出を以、外輪へ参り、大津二テ吞、暮合帰ル。

同十七日 御飛脚立と申事ニテ状認。昼過高村己屋ニテ盤上中・岡本氏(頼平)被参、夫ヨリ酒肴。先生と中間ニテはづみ、二階ニテ吞。野島ヨリも同到来。御下横目俊吉も隨身ニテ参り居一所二吞。

同十八日 早朝稽古出ニテ横山湖山へ参り候処、折柄留守ニテ兼テ十九日南園・文雄釜屋へ案内、詩歌之催し、且留別ノ志ニテ其義ニ付、預来臨度由認る也。昼頃、御上屋敷岡本己屋へ立寄り、昼支度、預馳走。野島も参り暫く咄合ノ内、松岡(七助)参り明十九日鮫州清風楼ニおいて歛筵相催、御用間なれば御出掛被下度段咄置。清五郎(野島)と一所二西ノ久保迄参り相別候テ、ヒジリ坂ニテ入湯。夫ヨリ汐見坂女芝居二幕見物。ソロソロ帰居候処、七平千歳館ニテ待居一所少酔、暮合頃帰ル。此日中島(廉太郎)・田村(直之助)着。

同十九日 曇 早朝ヨリ不分明ノ天気ゆえ催候義も相増居。昼過馬藏を南園へ遣し候所、井上文雄未来とて馬藏帰候跡直様、清風楼ヨリ使参り、只今皆様御入り有之候ニ付、早々御出會と申来り候へども、もはや七ツ過(午後四時過)ノ刻限ゆへ、夜入候工面ニ大泥、漸日入前工面付哉否、出席仕所、井上文雄ニ、女史貞子・南園・鳴鶴・水一方・節山参り居、甚以面白ク、然ニ文雄・貞子ハ外へ又参らねバ成ぬ所有之迎参り、鳴鶴・水一方二子も追々帰り、南園残り詩歌共揮毫、夫ヨリ猫(芸者)ヲ入レ余興。随分面白ク、尤雨ニ成九ツ時(夜十二時)帰ル。下横目同道也。

同 廿日 雨 詩抔考居中、中島兩人勤ニ来ル。晚方松屋ヨリ註文ノ品持参、四兩三步相渡ス。入湯二行。

同廿一日 晴 昼頃ヨリ桑名へ稽古ニ参り、日暮頃帰り吞デ寝ル。

同廿二日 晴 写本。昼過ヨリ俄ニ御流義調練ニテ、小目付当御屋敷へ被参、直様出勤。七ツ過相濟、猪半(猪野半平)同道ニテ、他出を以外輪へ参り

一酔して帰ル。

同廿三日 晴 写本。昼頃ヨリ稽古出を以、品川南園へ参り・山七・猪半一所二相成、南園ニテ酒ニ成り、美濃大垣藩斗三人も来り珍敷咄致し、七ツ頃帰り掛又大津へ立寄り再酔。夜ニ入帰ル。少々雨。

同廿四日 曇 兼テ柳橋ノ下、万八楼書画会。碧海ト宿約致し有之。五ツ頃外輪稽古出にて出掛、上御屋敷へ立寄り、碧海・吸江・今一人同行相携、右楼へ登り候処、段々出席有之居、扇面少々揮ヒ貰、寛々帰路ヲ促し、両国橋下ニテ少々給。尤万八楼ニても余程酔、席備式朱也。夫ヨリ上御屋敷へ再立寄、刻改ヲ受、五ツ頃ニ、十島へ参り、又少々酔ヲ重ネ候内興有リ。夫ヨリ四ツ前(午後十時前)帰り候所、田久(田村久吾郎)・山茂(山崎茂市郎)・弘橋(弘田橋太郎)右三人到着也。直ニ寝ル。

同廿五日 朝風雨、終日門出不致。暮合頃一酔と志候処、山七ヨリ被招、参り色々咄面白ク、四ツ過帰り寝ル。

同廿六日 御飛脚立ニテ、取急内へノ状認終り、築地御屋敷内調練へ出勤仕廻ヨリ、孝右衛門(田中嘉右衛門)小屋へ参り猪小(猪野光馬、小平太と革名)一所ニテ微酔。帰り掛入湯ヨリ主従ニテ、大津へ立寄再酔。四ツ時帰り寝ル。此日北代覚助宛・竹村(節之進)ヨリノ金封受取来ル。

同廿七日 晴 昼迄写本。夫ヨリ田猪(田村猪之助)同伴ニテ、高輪芝居へ参り、見物中、田七(田村七衛門)・同宿(藤村清八)も酔来一所二見物。日入頃帰り居候処、番馬場橋ノ南ニテ、武半(武市半平太)・岡猪(岡田以藏)・田孝(田中孝右衛門)・田中嘉右衛門ノ事)ニ逢、少咄シ中御暇ニ相成候様子聞申候。夫ヨリ夜ニ入帰り無酒ニ寝ル。

同廿八日 晴 七ツ時分迄写本。夫ヨリ両七(田村七衛門・山崎七平)一所二入湯二行。雨ニ成ル。日暮頃帰り夕飯過、高村己屋へ参り逢馳走。終二囲碁。四ツ時分帰り寝ル。

同廿九日 雨 朝七ツ時頃奏泉寺永衛病死。見廻ニ参り、帰り候テ写本。此夜酒なしニ寝ル。

同 卅日 晴 朝月代杯致し、桑野へ稽古二行。暮合頃帰ル。

安政四己年九月朔日

九月 朔日 晴 早々ヨリ桑野へ参り写本。八ツ頃（午後二時頃）桑野を出、道ニテ入湯。夫ヨリ迎月楼へ立寄り節酔。暮頃帰り飯後、黒岩誠覚ノ己屋へ咄ニ参り 暫ク嘶居、四ツ頃帰り寝ル。

同 二日 晴 昼頃迄写本。夫ヨリ誠覚と約し南園を訪暫咄して、帰路又迎月楼へ立寄り飲酔。日入頃帰ル。

同 三日 曇 山七同道ニテ井上文雄へ参り、帰り掛雨二相成、上御屋敷へ立寄り、碧海辺へ楓林写ノ函約致し、夫ヨリ桑瀬己屋（同宿藤村清八の舅）ニテ逢馳走。帰りかけ駕ニ乘り大津屋迄来り候所、池大先（源六）止宿ノ都合、別ニ宴を設折節、直七（下横目）参り合居候テ一所二飲。四ツ前帰ル。

同 四日 晴 岡本（頼平）晩方餐露（黒岩誠覚）ノ小屋へ参り咄候内 酒ニ相成。夜四ツ前迄咄帰り寝ル。雨。

同 五日 暁晴 写本。昼頃御屋敷ニテ、地雷業ノ試有之処、大守様（山内豊信）御覽被遊、首尾能相濟。晩方入湯ニ参り、明月庵ニテそばヲ給帰ル。此夜酒なしニ寝ル。

同 六日 晴 海宴寺楓見ノ兼約有之、南園へも頼管ノ所参り呉、上御屋敷ヨリ碧海・静山参り、餐露と一所二清閑ニ楓葉会。酒肴 齋 大ニ興有之。夜ニ入大津ニカイ余興乱酒ニ成。四ツ時過御屋敷へ帰ル。

同 七日 雨 写本済ム。山七同道を以、南園工暇乞ニ参り逢馳走。晩方帰路葛屋へ立寄り、少し又給。日暮頃帰ル。此日南園ヨリ餞別ニ細川林谷・益田重藏ノ印譜貰う也。

同 八日 晴 同宿・田恵同道ニテ御屋敷工参り、用事等右兩人工頼置候テ、鈴木先生工暇乞ニ参り候処、折柄留守ニテ、式朱巻包遣ヒ置。直様御屋敷えこと帰ル。此夜高村先生ヨリ餞別迎被招飲ム。

同 九日 晴 桑野へ餞別ニ参り沓歩遣ス。夫ヨリ帰り掛大津ニテ少々給。八ツ頃帰ル。夜ニ入黒岩餐露へ参り久敷咄し帰ル。

同 十日 晴 此日出足ニテ、何角始末大ニ多忙。市郎平手伝ニ参り呉、荷物ノ工面、念引合宜、もはや七ツ半頃、山七（山崎七平）・田恵（田中恵三郎）・同宿（藤村清八）と四人出足。仲間一同、外ニも段々見立人（見送人）夥敷、又三浦屋ニテ一同ノ餞別、余波ノ杯迎馳走ニ逢。夫ヨリ夜ニ入月も宜。四ツ時前、川崎宿本陣・佐藤惣左衛門方ニテ止宿。松岡七助父子ノ者も少先ニ着居、又追々跡交代ニテ被差立候仲間も右宿工到着。北岡竹次・塩井源四郎兩人来り、又久保嘉治馬も呼ニ遣し候テ来り、色々嘶承ル。四ツ過寝ル。

同 十一日 晴 朝日ノ出出足。土塚ヨリ鎌倉えこと参り、円覚寺・建長寺ヨリ八幡ハ不及申、頼朝公ノ御廟所等拜見。然ニ此日ハ円覚寺計リニテ、日入ニテ川瀬屋藤藏方へ着候所、遠馬刻限ノ張折夥敷中ニ、土州臣玉置平兵衛第子野島清五郎、安政四年己四月九日六ツ時乗出。青毛尺九寸と有り。山七ノ家来ヲ沓人連候外ニ、荷物為追、藤沢迄遣ス。馬込也。旅籠酒代共六百弍十文。

同 十二日 晴 建長寺ヨリ相初メ案内者を取り、八幡社内頼朝公御廟所拜見。実ニ懐古ノ情浮ビ申也。八幡社ニテ昼支度。一人前百廿四錢。夫ヨリ絵ノ鳥弁天へ参り、実ニ諸山ヨリ海へ引候富山（富士山）ノ景色無及。酒飯共沓朱と二十九文也。夫ヨリ藤沢柏屋半右衛門方へ着。膳先ニテ又少々給寝ル。旅籠ハ馬蔵扣へ有之。

同 十三日 晴 未明右出足。松岡氏（七助）と一所ニ成り道々咄面白ク、七ツ過小田原着。三千里外向帰程 水碧山紅探勝行―何妨□詩促、秋光興処不吟情と先づ落成。

同 十四日 晴 右出足。朝日ノ出前より湯本の方へ参り、金泉湯工入り、松岡父子ノ者、山崎（七平）一所ニテ、夫ヨリ函嶺へ登り権現宮へ参詣。右別当東福寺ニテ曾我兄弟ノ宝物百文ニテ見物。天野平左衛門出迎来り其内へ

參り候処、丁寧ノ扱右ニ付四人ニテ巷歩遣ス。右峠湖水より山上ヲ越ス富
士ノ景色いかにも。相携早発小原城函嶺登降八里程。為過秋晴蓮嶽秀吟
行不覺杖枝輕。夜ニ入五ツ過三島築井屋万四郎方へ着。山越ノ悦迎亭主ヨ
リ酒肴齋候もたらしニ付、四人ニテ二朱遣ス。快酔ニテ寝ル。

同十五日 曇 日ノ出頃右出足。原へ參り候節少雨ニ成候へ共、強テ降も不
為。富士ハ雲懸ニテ見へ不申。日入前駕籠ニテ蒲原江戸屋京助方へ着。
追々松岡父子ノ者、山崎も着候テ、如例酒ヲ好候テ快酔。此夜戲言ヨリ実
ニ成娼妓參り難義。漸返ス。雨不止。

同十六日 雨 七ツ時右出足。然ニ山越ノ夜ヨリ左リノ足、踏立出来不申。輕
尻或ハ駕籠ニテ通行。此日ハ雨も止不申に付、カゴ乗通し、松岡(七助)・
山崎(七平)ハ沖津ヨリ乗船、三保ノ方へ志、夫ヨリ久能山へ參拜ノ支度
ニテ、自分(岩井孫六)ハ足痛ニ付差扣。府中へ八ツ前頃着。脇本陣松崎
屋権左衛門方へ落着キ沐浴し、名物細工物杯相調、夫ヨリ快酔ニテ寝ル。

同十七日 晴 右出足。富士千軒様工參拜。実ニ美麗成事筆ニ尽しがたし。夫
ヨリ七平と駕籠ニテ昼飯。鞠子ニテ名物とろ、汁を賞し、輕尻島田宿へ參
り候処、神祭ニテ賑々敷、大井川へ日入前ニ來り、首尾能渡り、金谷扇屋
惣十郎方へ着。道筋ニテ為買松簾まつたけヲ為仕成。七平も同酔。五ツ頃寝ル。

同十八日 晴 右出足。諏訪峠へ登り、富士ノ景色甚よろし。駕籠ニテ日坂迄
來り、輕尻ニ乗り詩思、八ツ時少過、見附柏屋嘉平方へ着。山七(山崎七
平)日坂ノ石川依平と申歌人ヲ尋候テ隙取暮合着。一所ニ酒飲ミ直ニ寝
ル。

同十九日 晴 日ノ出頃右出足。松岡・山七ハ味方ケ原へ立寄り、後レテ舞坂
着。七ツ過ニ相成。新井(荒井)渡海出来不申。無抛藤本屋とやらニテ止
宿。

同廿日 晴 未明ヨリ船ニ乗り候処、西風ニテ渡海難涉。去共無難ニ着岸。
五ツ頃前田作右衛門方へ落付。鰻ノ蒲焼名物ニテ酒食。松岡氏・山七一所
ニ巷歩遣ス。夫ヨリ風昼強相成、寒氣烈敷夜ニ入、御油大和屋何衛門方へ

着。地震ニ余程家傾居ル。飲で寝ル。

同廿一日 晴 未明出足。道筋詩思。暮合頃有松ニテ名物しほりを四品ニテ巷
兩式歩三朱渡し、百余りつり(釣り銭)參ル也。夫ヨリ鳴海へ着候処、殊
ノ外鹿相(下腐カ)ニ付宿を替、大松屋佐平方ニテ止宿。此夜女四人來り終ニ三味線
為引返ス。

同廿二日 晴 右出足。宮ノ宿へ五ツ時過着。熱田明神へ參詣。夫ヨリ四ツ時
出帆。船中酒肴積込。七ツ時過桑名着。直ニ出足。六ツ時過四日市本陣清
水多平方へ着。是より藤村(清八)、田中(惠三郎)踏越し行。松岡氏(七
助)も外ニ連出来相別候テ、此夜も少々給寝ル。

同廿三日 曇 朝六ツ時右出足。二方荒神ニテ山七(山崎七平)と神戸迄三里
ヲ七百ノ也。夫ヨリ白子迄一里。此処より船ヲやとい宮川迄十三里ノ渡
海。昼頃ヨリ出帆、半途迄順風ニテ參り候処風風、暑ニ相成。二僕(孫六
と七平の家來)働を以、少々宛、船進漸。夜四ツ時神社と申処へ着。よし
だ屋何衛門貞衛門方ニテ泊ル。尤船賃式歩也。

同廿四日 晴 日ノ出過、右出足。二見浦えことと參り候処、名にしおふ
所、柄ニテ、委細ハ因ノ通り也。夫ヨリ浅間巖山へ駕籠ニテ登り、賃錢置
也。麓ヨリ式拾式町、内宮様ノ方へ下り、七十二町、カゴ賃四百五拾位也。
日暮頃下り着、内宮様(伊勢神宮)へ參拜下向之所ニ而、しゅつぽくノヌ
クモリニテ、夜分ヲ不厭、宇治橋ヲ過、相ノ山ヲ越ふる市ヲ少過、みよふ(明見町カ)
けん町十文字屋五平方へ着。四ツ前也。風呂ニ入り少々酒給。手引を取彼
ノ樓へ登り興有り。○日中、朝熊虚空藏様へ參詣ノ折、無双の万金丹ヲ式
朱ノ相求ル。

同廿五日 晴 入湯。夫ヨリ外宮様(伊勢神宮)へ半御膳ヲ上ゲ參詣。首尾能
相濟、宮川ヨリ松坂を過六軒茶屋へ暮合着。江戸屋何兵衛方ニテ泊ル。

同廿六日 晴 右出足。雲州を過、津山二里豊久ノ銀掛松ノ遺跡、道ノ傍ニ有
り。七ツ時過、関ノ宿大津屋五郎兵衛方ニテ泊ル。此夜芸者參り三味線ニ
テさわぐ、さわぐ。夜雨。

同廿七日 雨 右出足。鈴鹿山中、筆拾山返り駕籠ニテ、急乍見雨中。七ツ時過水口着。宿屋取り約ノ事忘レ、暮合頃少々ノ肴ニテ兩人一酔して寝ル。同廿八日 霽半雨。駕籠ニテ八ツ過草津着。丹波屋長兵衛方へ着。些々人女参り四ツ過頃迄三味線ニテ賑ヒ、久々ニテ鬱散也。此夜雨也。

同廿九日 半晴半雨 カゴニテ勢田迄参り、名高き長橋ヲ過、石山寺へ登り候処、山門ノ内両輪ノ紅葉、且本堂ノ方へ登り候テも、同所且巖石ノ模様、色々ノ屈曲、紫式部源氏ノ間有り、夫ヨリ月観庵ノ方へ参り候テハ左ノ方へ当り、夫ヨリ湖水数里ノ間ヲ眼下ニ見下し、右ノ方ニは棚上山ひら、実ニ絶景。雖李杜不能弁景と思ふ斗り也。夫ヨリ麓ニテ支度致し、カゴニテ粟津ノ方へ参る道筋、今井四郎兼平、□…□書田ノ中ニ有り。又余程行、膳所ニテ、御城ノ西辺ニ義仲公ノ御墓 且芭蕉塚有り。其所近來焼失ノ由。傍ニ家有り。主人ハ俳人ニテ帆道と言フ。塚ノ東西ニ薄と萩と有り。昔其角ノ句ニ、

なきからを笠でかくすや

かれ尾花

と言句ありて、命日ニハ、右両方ノ内ノ尾花を塚ニ手向しよし。右ノ所見物終り、大津へ七ツ時着。直二三井寺へ登り弁慶引はり鐘見物。夫ヨリ又カゴニテ七平と一所ニ唐崎ノ松へ行。日暮坂本ニテ俵具屋嘉衛門方ニテ泊ル。

同 卅日 晴 案内者を取、叡山（比叡山）へ登り、先麓ノ日吉山王二十一社参詣。追々無動峠へ参り、湖水を見晴し、景色言ニ詞なし。山八合ノ所□堂。華堂戒壇有り。且伝教大師ノ廟有り。雪屋根へ懸り堂ノ前ニも三寸斗りも積候所有之。寒氣余程身ニ染、門前ニ出茶屋有り。四ツ頃蕎麦切三杯給。夫ヨリ鷹野ノ方へ下ル。八瀬ノ里見ユル谷合也。尾原ノ里も近カ也。

高野川ノ堤を二里斗りも下り、下加茂ノ向ヒノ茶屋ニテ支度。加茂明神へ参詣。夫ヨリ名高き吉田えことと参り候所、家根造り彼是余り大クハ無御座候へ共、中々申もさら也。日本六十余州ノ神々を本堂ノ両輪エ小家根

ニして、塀ノ如く並べて勧請す。敬て拝し終り、程無日暮ニ及ビ、ソロソロ三条え如々参り、橋を西へ渡り、五六軒西ノ南輪日光（大黒町カ）三河屋六兵衛方ニ逗留仕。昼馬蔵（岩井孫六家来）、駒蔵（山崎七平家来）も伏見ヨリ来り居候也。沐浴し醉眠也。

安政四己年十月朔日

十月 朔日 薄曇 案内ヲヤとい嵐山え如々参り掛、二条ノ御城拜見。西ノ在へ出逢ニ山近カへ参候処、桜ノ葉楓葉交霜ニ染、扱名高場所ニ付詠も一入よろしく春ノ詠ヲ秋見るも却テ興有り。拙作一首。大井川ノ流れ清く渡月橋ノもよふ、いかにも宜。法輪寺へノ引合尚更也。川ノ傍ニ四五軒茶屋有り。さん豆腐ニテ一醉中、時雨ニ相成。紅葉ノ詠めいかにも、いかにも。夫ヨリ清涼寺釈迦ヲ拝し、夫ヨリ前ニ天龍寺ノ庭ヲ見、むぞふこくし（夢窓疎石）の作也といふ。程無金閣寺へ来り、高名ノ所ニテ、庭池ハ不及申、鴛鴦おどり数百羽群レ遊ぶ。閣へ登り候へバ三代將軍義満公ノ像有り。三階ニテ衣笠山ヲ右ニ見テ、何共言斗りなし。図絵ノ通り也。少し奥ニ南天床柱ノ室有り。惣テ見料ハ二百二十銅也。見物終りウズマサヨリ北野天満宮ヲ拝し、実ニ御神徳有難念ずる也。絵馬堂狩野家ノ二帟とら有天井、生るがごとく見ゆる。最早日入頃ニ相成、御門前ノ茶店ニテ酒食被進候へども、満腹ノ場合ニテよふヨフおでんにて茶を給。そろそろ宿へ帰り風呂ニ入り微酔し、当夜祇園会ノよしニテ、被導ゆえニテ参ル。賑々しき事也。祇園町ノ茶屋ニテ就中「一力、井筒屋」よろしき由、彼是見物して帰ル。

同 二日 晴 案内ニ為引禁裏御所拜見。一作々々年仙洞御所ヨリ出火。大御所も不残炎上。新御普請也。紫宸殿内侍所等外輪へ見ゆる。東西南北ニ美々敷御門有り。日ノ御門ノ向フ白川院様ニテ菊ノ御守九重ノ御守頂戴。九重御守ハ御初穂三包也。菊ノ御守ハ三十六銅也。夫ヨリ銀閣寺ノ方へ参り庭見物。月待山右ノ向ニ有り。迎月台銀砂灘設奇麗也。金閣も銀閣も庭石、諸大名ヨリ寄進ノ石皆ニ名有り。方丈ノ座敷廻り皆狩野家ノ真筆。ことごと

とく金襖也。夫ヨリ知恩院へ移り、是ハ門前ヨリ方丈本堂はじめ広大也。

座敷廻り右同断。上段中段下段ノ設、金屏風金襖迄皆狩野家ノ筆。庭廻り前件ノ処とは違ヒ奇麗ニそふじ。本堂ノ前小高き所鐘堂有り。鐘ノ高サ壹丈二尺、差渡し九尺五寸、厚九斗丁度。扇子ノ丈ケ有るといふ。見物終リ高台寺へ参り、豊太閤と大政所御像、且政所ノ御兩親ノ御像、当山開山ノ人像、右普請奉行ノ堀久太郎ノ像有り。方丈ノ方ニは鶴ノ間、雁ノ間、松ノ間、御上段、且政所御化粧ノ間、堂上方寄合ノ間有り。襖色紙ノ張り交ゼ、擬庭ハ利休ノ作也といふ。夫ヨリ正阿弥ノ辺へ参り、三階楼へ登り、

洛中洛外眠下ニ見ゆ。もはや七ツ過也。八坂塔ヨリ清水寺へ参り、名高、音羽ノ瀧見終リ、清水焼三品分ニて七百七十文ニ求メ。暮合ニ成候テ、祇園町通り(四条通り)宿へ帰り、微酔ニて寝ル。夜中頃ヨリ雨ニ成ル。

同日 雨 色々用意致し、梁川星巖尋候処、折柄風邪ニテ平臥ノ由、塾生ヨリ申参り候ニ付、御構もなくバ御病間へ可参と再申入。夫ヨリ対面を致候処、最早七十ノ老翁鬚長ク健成面色ニて、机辺ノ手籠笥初、彼是ノ道具皆唐物ノ様見受申候。南鎌なると、壹片土産迎遣ヒ半折物ニ枚揮かき貫くわん申し、宿へ帰り支度致し、東福寺通天ノ方へ雨中ニ参り、通天橋辺ノ楓葉甚以好景ニて、最早黄昏近ク、雨ハ濃ク成る。次第ニ暗クハ成り、カゴニ乗り伏見京橋ノ南、御用達大佛屋着。主従不残酒宴して寝ル。

同日 四ツ頃ヨリ晴、七平ハ男山ノ方見物迎先へ達、自分淀船ニ乗支度、段々買物等も済、程無昼前伏見出足。淀乗船追風宜。且七平と申合少々酒肴積居候ニ付、船中退屈なし。夜五ツ時前着坂。伊丹屋藤右衛門方ニテ逗留。此夜男山、取寄久振ニ咽ヲ潤ス也。

同日 晴 御屋敷工届ニ参り、昼頃宿へ帰り、米屋船(香我美郡岸木の島中林右衛門の大廻船)ノ船頭勇藏来り、何角咄ノ内酒ヲ出し、夜迄咄し居帰ル。心齋橋白粉壹歩文相求。

同日 晴 朝ヨリ勇藏案内致し呉、少々買物。尤ふしよふ盆、二つ注文。物朱小口へ松貝ヲフセル筈。差渡壹尺九寸、式枚ニ付壹両式歩迄ノ内、夫

ヨリ広瀬桐藏(絵師広瀬金藏)へ相尋候処、播州辺ニ出遊ノ由ニテ留主。残念千万。依テ壹分遣ヒ入門料也。扇面五本頼置。夫ヨリ又々勇藏導を以、泥子芝居へ這入り、染太夫・菅原之三段・桜丸腰切ヲ聞、随分面白し。夫ヨリ九軒ノ田へはまり込、興有り。夜九ツ時分(夜中十二時)宿へ帰ル。此昼船賦也。(昼食は大廻船の負担)

同日 晴 少々買物等致し、京都詰ノ御足輕三人同船へ賦有之。此夜あし川エ参り乗船。夜半頃ヨリ風出兵庫(神戸)迄参り夜泊。翌日も風なく滞船。

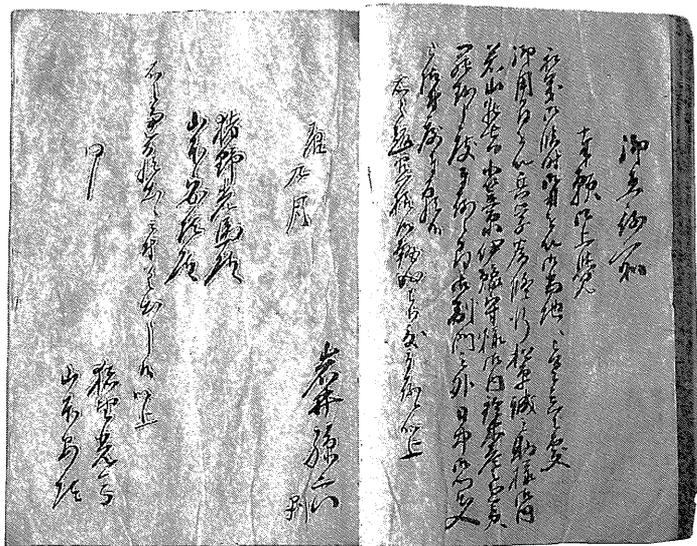
同日 晴 風なく滞船。夜右出帆、追風宜キ也。船心地もよく御座候。快晴する也。

同日 晴 東寺ノ崎(室戸岬)迄七ツ時分ニ参り候処、風為暫、其近辺ニ漂ヒ居ル。

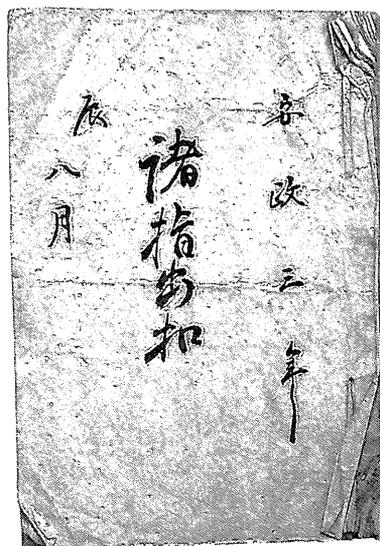
同日 晴 田野沖迄参り居候処、追風不宜。終ニ七ツ時前室戸ノ港へ入津、上陸する也。

(2) 「諸指出控」所収の史料(抜粹)

奉願 口上覚
私義御臨時御用を以御当地へ被差立候処、御用間を以為兵学修行、松平誠之助様御内若山壮吉、小笠原伊予守様御内鈴木彦之進方へ罷越申程奉願候間、御別門之外、日中御門出入「被仰付度奉願候
右之趣宜様御執成被下奉存候 以上
辰九月 岩井孫六 判
猪野光馬殿
山本安次殿
右之通願出候ニ付差出候 以上
同日 猪野光馬



「諸指出扣」の中の史料紹介の部分



岩井孫六「諸指出扣」の「表紙」

御自筆写

此度操練申シ付候間、執レモ出精致スベク候。尚巨細ノ儀ハ、家老共ヨリ申聞スベク候。修行イタシ候儀、肝要ニ候。

右御自筆ノ写、役場ヨリ拝承為仕候様、御家老中被仰聞候条、可被得其旨候

辰十月二十七日

渡辺弥久馬

以上

覚

一、操練ノ義ハ、於テ国許モ、仰出サレ候通り、暫時モ、捨テ置カレ難キ御時勢ニ付、於テ御当地モ同断仰付ラレ、執レモ神妙ニ相心掛、御趣意、厚ク引受奉リ、油断コレ有間敷候。備エ立ハ、先越方ノ通り御調ヘテ仰付ラレ候ヘ共、志有ノ面々ハ一偏ニ抱増セズ修行イタシ候儀、肝要ニ候。

一、御軍整ノ儀ハ、当時右ノ通りニ御座候得共、西洋火術ノ儀ハ、新ニ相開ケ方々第一ノ利器ニ付、執レモ兼学致シ候様。一昨年モ仰付出ラレ、右ノ趣御家老中、御聞サレ候。

辰（安政三年）十月二十七日

渡辺弥久馬

以上

口上

別紙ノ通り差廻サレ候条、其旨得ラレ、仲間一同触聞セラレベク候。

渡辺弥久馬

以上

野島清五郎 殿
秦泉寺永衛 殿

右ノ通り、御目付中ヨリ、申シ来リ候条、各々其ノ様御心得成ラレベク御拝承候。

以上

野島清五郎
秦泉寺永衛

仲間一同宛

十月二十九日拝見仕リ 池源六へ廻ス

(3) 岩井孫六の幕末期における略歴(附、同伴同僚の猪野半平の略歴)

次に日記の筆者である岩井孫六の幕末期における活動の略歴について、土佐藩『郷士年譜』(高知県立図書館蔵)から引用・紹介しておきたい。

□岩井孫六正路の略歴(出典史料「土佐藩郷士年譜」)

妻 川田俊平妹 死別

後妻 貞岡直八女

安政三辰年八月御臨時御用ヲ以江戸表へ被指立「旨父十歳へ被仰付候
処多病ニ付孫六へ被仰付度段」願之通被仰付品川御屋敷に相話候内廻
番役念入候「訳ヲ以御金拝領被仰付難有仕合奉存候
同二戌年香我美郡海防小頭役被仰付為御補米一ヶ年分吉米四斗被下置
慶応四辰年正月郷士「隊第七小隊入被仰付嚮導役を以御隣国高松表へ
「被指立同二月帰国仕七月迄相勤申候

文久三亥年ヨリ小頭在役中赤岡岸本夜須三ヶ所「台場御備付之大砲掘
出之節寸志人夫指出候「訳ヲ以於赤岡御用家御酒頂戴被招付難有仕合

岩井孫六正路

妻 川田俊平妹 死別
後妻 貞岡直八女

安政三辰年八月御臨時御用ヲ以江戸表へ被指立
旨父十歳へ被仰付候内廻番役念入候
願之通被仰付品川御屋敷に相話候内廻番役念入候
訳ヲ以御金拝領被仰付難有仕合奉存候
文久元酉六月家督無相遠相續候御付候
同二戌年香我美郡海防小頭役を仰付為御補米
一ヶ年分吉米四斗を置慶応四辰年正月郷士
隊第七小隊入被仰付嚮導役を以御隣国高松表へ
被指立同二月帰国仕七月迄相勤申候
文久三亥年分小頭在役中赤岡岸本夜須三ヶ所
台場御備付之大砲掘出之節寸志人夫指出候
訳ヲ以於赤岡御用家御酒頂戴被招付難有仕合
奉存候
明治元辰年九月香我美郡郷兵中隊頭を以文學
弄砲術取立役被仰付同己年二月帰免相成申候
尤勤役中一ヶ年分吉米吉米右斗被下置候

「奉存候

明治元辰年九月香我美郡郷兵中隊頭ヲ以文学「并砲術取立役被仰付同
己年二月御免相成申候「尤勤役中一ヶ年分吉米壹石式斗被下置候

〔猪野半平の略歴（出典史料「土佐藩郷士年譜」）

なお、上記の岩井の日記の内容と略歴が歴史的事実を記録した信頼できる史料であることを傍証する史料として、岩井と同時期に江戸表に出足した、徳弘孝蔵の西洋砲術門人である郷士・猪野半平の略歴を、同じく土佐藩『郷士年譜』より抜粋して紹介しておくこととする。

「二十三日以後無別儀被仰付之

(三) 松田智幸氏の紹介 幕末期土佐藩研究に魅せられた半生

この度、幕末期土佐藩の激動する政治や軍事の動向を具に物語る、貴重な所蔵史料「岩井孫六『江戸日記』」を、本誌に「史料紹介」として掲載して下さった松田智幸氏は、高知市在住の幕末史研究家である。松田氏が私蔵する史料を抜きに、幕末期の土佐藩研究は成り立たないと評しても決して過言ではない。

それほどに幕末期土佐藩に関する貴重な原史料を蒐集、私蔵されている松田氏は、それらの史料の解読・分析を根気強く進められ、従来の定説や学説を丹念に吟味・検討され、資料的根拠のない誤解や誤謬に基づく歴史叙述の発見と是正に務められてきた。そのような研究的な半生の成果として、同氏には、『土佐藩勤王党考察』（平成九年）や『龍馬斬殺の新事実』（平成十一年）等の著書があり、沢山の論文を執筆されてこられた。特に坂本龍馬研究には心血を注がれ、有名なNHKの歴史番組「歴史誕生」の「坂本龍馬」にも出演され（放映

安政三辰二月自力修行方奉願御聞届之上長崎表江「罷同六月帰着仕

同年八月七日御臨時御用ヲ以江戸表江被差立之

同年九月於江戸表砲術役并製菓御用高作配役被仰付之

同年同月洋式砲術御用修行方被仰付之

同四年己三月公辺江御願之上軍艦修行方被仰付之講武所エ出勤仕

同年詰越勤被仰付大砲器械役以御用方被仰付之

同五年午年大砲器械改正濟之節金式百疋被成遣之

同年九月二十日御暇被仰付候処御差留ヲ以御願之上於「大森丁場大砲打方

被仰付之

同年十月地雷火水雷火業前御奉行中文武頭取中御「見分被仰付之

同年十二月先達テ於大森丁場大砲打方首尾能相勤候「訳ヲ以金五両被成遣

之

信州大学教授 坂本 保富

は平成三年五月二十二日。その後、同番組の内容は、『歴史誕生』の『幕末青春伝』第二巻に収録されて出版）、新発見の原史料を基にして、従来の定説に修正を迫るような龍馬の思想と行動の軌跡を証言された。

そのような松田氏に、先の大戦中には志願兵として航空隊や海兵団に勤務されたが、終戦後は建設省職員となられて水資源開発公園に出向され、白亜の瀟洒な大原富枝文学館が建つ吉野川上流の早明浦さあけうらダムの建設に尽力されたエンジニアであられる。が、若くして歴史学の魅力に惹かれた松田氏は、本務の傍ら、深い郷土愛に支えられて土佐藩を中心とする幕末史研究に着手され、学問的な批判に耐え得るような原史料に基づく土佐藩研究をめざして孤軍奮闘されてこられた。

かかる松田氏に、私は、一五年に及ぶ御交誼を給わってきた。思い返せば、

同氏との出会いは、まさに偶然の必然であった。実は、私は、昨年三月、十余年の歳月を費やして、高知市民図書館が所蔵する幕末洋学関係史料「徳弘家資料」を中心史料とする研究を纏めた学術研究図書『幕末洋学教育史研究』を、高知市議会で刊行経費の全額を予算化していただき、高知市民図書館から出版することができた。同書は、土佐藩を中心とする幕末関係史料として学術的価値の高い「徳弘家資料」という歴史資料の解読・分析に基づく研究の成果である。それを、土佐藩の本拠地である高知市から、広く日本の学術界に向けて公刊することができたことは、まさしく、地方の時代における地方からの学術文化の発信の具体化に他ならず、地方の時代を象徴する実に意義深い学術文化の振興事業であり、研究者としては、誠に光栄なことで慶賀の至りである。

実は、その拙著が誕生する契機を提供された方こそが、松田氏に他ならなかったのである。それは、全く面識のない方からの一本の電話からはじまった。平成二年の初夏に、私の日本歴史学会誌に掲載された幕末洋学史研究の論文「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者―幕末期における『東洋道徳・西洋芸術』思想の教育的展開」（日本歴史学会『日本歴史』第五〇六号、吉川弘文館）を読まれた松田氏から、「幕末洋学史研究にとつては、第一級史料と思われる膨大な土佐藩「徳弘家資料」が発見されたので、是非とも御来高いただきたい。」とのお招きを受けた。一体、どのような史料なのか、半信半疑の私は、早速、大学の夏休みを利用して、その年の八月に高知に参上し、高知市民図書館蔵「徳弘家資料」と対面した。はたして、同資料の歴史研究上の価値は、私の予想をはるかに超えるものであった。以来、私は、毎年、春休みや夏休みを利用して高知に赴き、同資料の写真撮影や関係資料の蒐集、そして解読した史料の解釈や分析の妥当性に関する吟味や検討などの研究活動を、松田氏の全面的な御協力と御支援を給わって継続的に遂行していった。特に、高知市民図書館が所蔵する「徳弘家資料」は、約六百点を数える膨大な分量ではあるが、決して全体を網羅しているわけではなかった。徳弘家が火災に遭遇して途絶える前に、「徳弘家資料」の中でも歴史的価値の高い良質の史料

が、相当数、売却されるなどして、内外に流出してしまっていた。土佐藩関係の貴重な史料が、流出し散逸するという悪しき事態を憂えた松田氏は、一念発起、約二百点に及ぶ徳弘家関係史料を買い戻して所蔵されている。そして、私の「徳弘家資料」を中心とする幕末洋学教育史研究に対して、松田氏は、私蔵する「徳弘家資料」や関係する貴重な諸史料を、惜しげもなく提供して下さいたのである。誠に感謝に堪えない。

松田氏は、私利私欲や名聞冥利を超越した、剛直で正義感の強い、まさに真実一路の御仁である。思えば、私の拙い研究の人生では、いつも素晴らしい人々との出会いがあった。とりわけ資料探訪の旅先で出会った人々は、個人的な私利私欲を超越して見返りを求めず、素朴な郷土愛に満ちた善意の方々であった。そのような典型的な方が、松田氏であったといえる。その松田氏には、今後は、これまで苦勞されて蒐集された史料の数々の解読・分析を楽しませ、土佐藩史を中心とする従来の幕末史研究の誤謬を正されるべく、呉々も御自愛の上、御健筆を振るわれますことを、衷心より御祈念申し上げる次第である。